

宮藤芳佳の孤闘～第二次ネウロイ大戦異話～

ゴロプ少佐は俺の嫁

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第二次ネウロイ大戦が終結して1年。

人類はふたたび以前のようになり始めた。

しかし再び起きた戦争において、ウィッチが使用されることは無かった。

宮藤芳佳、ただ一人を除いては。

人を撃つという行為に精神を病み多くのウィッチが飛べなくなっていく中、彼女のみが溢れ出る魔法力で飛べた。飛べてしまった。そしてそんな彼女も、苦悩のうちに空に散った。

しかし、彼女は1929年の鎌倉で、二度目の誕生を果たしてしまふ。

『その力を、多くの人を守るために——』

悪夢に苦しみながら、彼女は悲劇の回避を目指す。

2017/09/10

現在読みにくい箇所やキャラがブレていた箇所の改訂作業を行っております。ストーリーは変わりませんが台詞等変更されている箇所も有りますのでご了承ください。

改訂済：プロローグ、一話、二話、五話、三話

目次

第1章 扶桑海事変	
プロローグ―1951年―	1
第一話	5
一話、きっかけ	12
第二話	15
第三話	24
第四話	37
第五話	46
オラーシヤ軍兵士の回想	53
扶緒戦争の流れ（投稿し直し）	66
第六話	72
第七話	80
第八話	89
第九話	94
第十話	108
第十一話	114
紅炎の魔女	
紅炎の魔女・一話	120
紅炎の魔女・二話	122
紅炎の魔女・三話	131

第1章 扶桑海事変

プロローグ—1951年—

風を切って飛ぶ。

エーテルを掻いて矢のように。

紺碧のただ中を、白雲が後方へ流れていく。

私がかつて感動し、ずっと見ていたかった景色。

今となつては、最もどうでもいい物の一つ。

だって、これを見ているということは、今日も私は人を殺すんだろうから。

「オラーシヤ機、11時方向より12機接近。少佐、戦闘を開始してください」

……ほら来た。

——1951年、ウラジヴオストークウラジヴオスト田浦塩市上空——

「少佐？どうかなされましたか？」

数秒経つても応答が聞こえない事に気付いた通信兵が声をかけてくる。

「……なんでもありません。戦闘に移ります」

前方に陸地、さらにその手前に10ほどの黒点が見える。そのひとつひとつに、国を護るための、人を守るためのパイロットが乗っているのだろう。

(それを、私は――)

しかし、これを放棄すれば、大切な人が不慮の事故に遭う事になっている。

ため息をつき、特注の武器を構える。

(こんなことをするために、ウィッチになったんだっけ?)

私の魔法力を直接照射する武器。本来はネウロイを相手にするた
めに開発されたもの。彼らの装甲を撃ち抜くそれは、飛行機など一瞬
で蒸発させることが出来る。

(……嫌だよ)

でも、ごめんなさい、と呟き。

「攻撃、開始」

空が光り、点は消えた。

空を飛ぶことの楽しさを知ったのはいつだったろうか。

赤城を守った時?

仲間と飛んだ時?

ネウロイを倒した時?

今となつては思い出せない。

あの戦いが終わった後は、平和になると思っていた。みんながそれ
ぞれの道を歩き始め、世界も復興に向けて歩きだした。

「もう戦わなくていい」

誰もがそう思っていた。

どうして私は飛んでいるのだろう。
もう倒すべき敵もないのに。
守るべき者は守ったのに。

どうして私は飛べてしまうのだろう。

「唯一のウィッチ」などと呼ばれて。

いらぬ称号も付けられて。

今日も12人殺した。今まで殺した数なんてわからない。

もうあの美しく感じられた空は、今や飛ぶだけで私に罪を背負わせる地獄だった。

だからだろう。本当にふと、言ってしまったのだ。

「もう、飛びたくなんて、ないな」

言ってしまった。その瞬間だった。

ガクン。

魔法力が切れ、ユニットの制御が利かなくなった。

「え」

落ちていく体。

ユニットはウンともスンとも言わず、それどころか砕け散った。

死ぬのか、と思ったが、不思議と怖くは無かった。何十人、下手すると何百人も殺した。やっとそんな行為から解放されるのだ。もう人を殺して誉められるような地獄から離れられる。自分を悲しむ人などいないだろうし、監視も無くなるだろう。

そう思うと、私は自然と笑顔になった。

ふと考える。

私は死んだらどうなるのだろう。

お父さんと会える？

そんな筈はない。

私が殺したあの人たちの所に行くんだろうか。

だとしたら嬉しい。
やつと謝れる。償える。

幾らでも罵られるし、幾らでも殴られよう。もしかしたら死ぬほど痛い目に遭うかも。
それで良い。

「そうだったら良いなあ」

そして、私は、春先の花が咲き始めたばかりの、シベリアの大地に叩きつけられた。

1951年、5月23日。

第二次ネウロイ大戦終結から2年後。

「オラーシヤ領」「ウラジオストク」付近の上空にて作戦行動中の扶桑皇国海軍所属のウィッチ、宮藤芳佳少佐の機体に不具合が生じた。少佐は回復を試みるも叶わず墜落したと見られた。

敵地のため捜索は出来なかったが、オラーシヤ陸軍により乗機と少佐の遺体が発見された。その後のオラーシヤ側の調査でシールドを発動せずに地面に激突、そのまま死亡した事が判明、その遺体はウラジヴォストーク郊外に遺棄されたという。

これにより、扶桑皇国だけでなく全世界の軍事組織に所属するウィッチはいなくなり、戦闘機時代が到来することとなる。
空から、魔女は消えたのだ。

第一話

声が聞こえる。

やめて、わたしはしにたいんだ。

たたかいたくないんだ。

ころしたくないんだ。

なんで、わたしをおこすの？

ねむらせてよ。

やっとしねたんだよ。

やっと――

「清佳、よく頑張ったな」

「ええ、一朗さん、私たちの娘よ」

懐かしい声が聞こえて、そして「誰か」の泣き声に掻き消された。

1929年8月18日、扶桑皇国、鎌倉、宮藤診療所。

宮藤芳佳は、2回目の生を受けた。

その日は桜の咲く美しい春の日で、私の学校は明日が入学式、そんな日だった。

私は家の前で大泣きしていた。明日は入学式だというのに、お父さんが何処か遠くに仕事に行ってしまうと聞いたからだ。

「お父さんいっちゃだあー！あしたのにゆーがくしき、ぜったいくるって、いったでしょー!!」

見に来るって約束してたのに。来るって言ってたじゃない。私はそう駄々をこねた。不思議な既視感を感じながら。

「すまない芳佳、大事なお仕事なんだ。これが上手くいけば、ネウロイをやっつけることが出来る」

知っている。ストライカーの開発だ。私はそれに乗るんだ。
それでお父さんは、身を屈めて私に視線を合わせて、
「終わればずっと、芳佳と一緒にいられるんだ」って言うんだ。

(…あれ?)

違和感。

(こんな場面、前にも無かったっけ)

いままでも、何処かで見ることがあるような感覚を感じたことはあった。でも、これほど強烈にその違和感を感じたことは無かった。そして、頭の何処かでお父さんを止めなくてはいけない、と言う声がする。

ここで別れると二度と会えない、そんな気もした。

でも、理由がわからない。

結局、私が取れる手段はワガママを続行することだけだった。

「いったらゆるさないんだから!」

「おとーさんは、私をキライになったの!?!」

などなど。そして流石にワガママが過ぎた私を、

「芳佳。私が留守の間は、そんな風にワガママを言って困らせちゃあいけないよ」

とお父さんは嗜める。

あ、ここは覚えてるな。

次にお父さんが私に言うことを、私は「覚えている」。

お母さんに別れの言葉を告げたお父さんは私に向かって笑顔なまま、どこか神妙な雰囲気でこう言うのだ。

「芳佳、よく聞きなさい」

忘れていた、約束。

「芳佳、お前にはお母さんやお祖母さんに負けない大きな力がある」

この言葉を、私は知っている。「私」の行動の原動力になった約束。――守れなかった、約束。

「その力で、みんなを守るような立派な人になりなさい」

その言葉は、私が忘れていた事を思い出させるには十分すぎた。それを聞いた瞬間、頭の中で何かがはじけた。

そして、私は「思い出した」。

お父さんの死亡通知。

みっちゃんの手紙。

遠い異国での戦い。

ネウロイの呻き声。

仲間たちの姿、声。

全てが終わった後の「戦争」。

兵の恨みの声。

死の記憶。

——私は、約束を守れなかった。利用されたとは言え、自分の力で「守る」どころか殺めてしまった。しかもあろうことか何故か受けた二度目の人生の中でそれを忘れていた。

お父さんがこつちを見ている。

私の口から言葉が漏れた。

「ごめんなさい」

私は、謝った。謝らないといけなかった。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

約束を守れなかったお父さんに。殺した人に。仲間と言ってくれたかつての人々に。

殺してしまっただごめんなさい

うだ、私はそれぐらいの事をしたんだ。それが当然の報いなんだ。力で人を殺した私なんて――」

「もし芳佳がそれほどの事をしたなら、それを償わなくてはいけないよ」

（ああほら、お父さんだってそう言ってる。今私が出来る償いって何だろう…？ あ、そうだ！）

「わかった。私は死ねばいいんだね」

お父さんは呆けたような顔をした。そして、今まで見たことの無い怒気を私に向け、私の頬を張った。

「やめろ芳佳！」

あつけに取られる私にお父さんは言う。

「芳佳。ここには私しかいないし、誰に謝っているのか私にはわからないし、そもそも芳佳がそんなことをしたとは思えない。芳佳は良い子だからね」

「ううん、私は悪い子だよ！」

だって、自分の力で何十人も殺した！

「だったらー！」

父が自虐に満ちた顔を見せた。

「その誰かに代わって、私がお前に『罰』をあげよう。だから、死ぬなんて間違っても言うんじゃない」

お父さんは悲しそうな顔をしながら、

『私との約束を絶対に守る。』それが、芳佳の償いであり、罰だ」

と言った。

「お父さんとの約束を守る…」

「そうだ。『その力を多くの人を守るために』使いなさい。そして、さつき言ったような立派な人になりなさい。それが、私との約束で、誰かへの償いだ」

（罪を、償う。お父さんとの、約束…）

「それが、出来るかい？」

お父さんは私の目をじっと見た。

正直に言えばそんな事で赦されるとは思わなかったが、私はそれが「前」を知る自分にしか出来ないことだと気付いた。

そして、泣き腫らした目で見つめ返した。

「…うん。わかったよ、お父さん。私は、約束を、守るよ」

私は、この瞬間に、未来を変える事を決意した。それが、私がもう一度生まれた意味であり、償いだと感じた。これは私が受けるべき「罰」で、これに人生の全てを賭けるのだ。

すると、お父さんは私の頭をワシヤツと撫でて、「良い子だ」と言ってくれた。そして立ち上がると、少し慌てたように、

「…：芳佳、私は仕事にいつてくるからね」

と私をもう一度抱きしめた。

「『罰』をくれて、ありがとう」

どこか歪んだ私の言葉に、

お父さんは一瞬絶句し、無言のまま頷いた。

「行つてらっしゃい、お父さん！」

立ち上がったお父さんに向けた私の声に、お父さんは笑顔を見せると、

「行つてきます、芳佳」

と言つて、港の方へ向かつていった。

しばらくして、私はお父さんが出ていった方を向いて、もう一度「ごめんなさい」と謝つた。

それは、自らの父を「賭け」に使つたことへの謝罪だった。

思い出したのだ。ここで父はストライカー研究のためにヨーロッパへ向かい、「前」と同じならばそこで死ぬ。本当は引き留めたかった。しかしまだ七歳にもなっていない一介の娘がどうこう言つたところでもうにもならないのはわかつていたし、ここで引き留めたらストライカーが作れず、結果的に皆を守れない。罪を償えない。

だから、これは賭け。

未来を変えて、お父さんが死ぬ1939年に私がブリタニアのお父さんの研究所を守れば、最初の賭けは私の勝ち。

私が、今から行動を起こして未来を変え、皆を守り、人どうしが争いをおこさない未来に変える。それが出来るかどうかの最初の賭けだ。

私は、未来を変えるのだ。

1935年、3月31日。芳佳の償いが始まった。

一話、きっかけ

第一次ネウロイ大戦。

それは人類とネウロイの過去最大の争いであり、また人類兵器の大きな変革期でもあった。それまで主流だった空飛ぶ箒がネウロイに対する兵器として時代遅れになり、ウィッチでなくても空を飛べる「飛行機」と箒よりも何倍も何十倍も速く飛べる「ストライカーユニット」が取って変わったのもこの戦争である。

少年工員として竹田商会で働いていた私は、戦後の初期ストライカーの開発から携わっており、しばらく経つとストライカーの専門家として「博士」と皆から呼ばれるようになった。(いつのまにか社名も私に由来する「宮菱重工業」に変わっていた。) 気恥ずかしいのであまりそう呼ぶなど言っているのだが…

そんな折に、そろそろ所帯を持ってとも思っていたんだろう、かつて世話になったウィッチの娘さんとして軍から来た上司に紹介されたのが、愛する妻、清佳^{さやか}だった。

そして、私達の間には娘が誕生する。

名は「芳佳」と言う。少し言葉を覚えるのが早かったり、教えてもない言葉をとときどき話すこと以外は至って普通の愛しい娘だ。

研究で忙しい私はあまり構ってやれなかったが、治癒魔法を使うウィッチの家系に生まれたからか、はたまた体が丈夫なのか病気ひとつせず、毎日山を駆け回る元気な子に成長してくれた。

普段は妻やお義母さんが面倒を見てくれていたが、特に寂しがる様子は無い、とのことで父親としては少しさみしいものがある。

とにかく普段は元気で喧嘩の話も聞かないような子の芳佳だが、あの時は全くと言って良いほど「違っていた」。

私は何か胸騒ぎを感じていた。

「ネウロイを倒すために新しい理論の発見のためには欧州の最新技術が必要だから」という理由で欧州に行く。ただ研究をするだけだ。

もう一次大戦から10年以上がたち、ネウロイの大規模な活動も認

娘にそこまで言わしめた何かへの怒り。

軽々しく「自分が死ねばいい」などとほざく娘への怒り。

気付いたときには、芳佳の頬を叩いていた。

そして叱った私に対して娘は償いの方法を詰問してきた。

私は、本来芳佳が自分自身で見つけるはずの「芳佳の生き方」を、強制付けた。「その力で皆を守れ」と。「守る以外に使うな」と。これは正しいことだ。でも、それは自分で気付くことが大事なのであり、他人に決められたのでは意味が無い。しかし、私にはそうする他なかった。芳佳はおそらくこの「償い」をずっと続けるだろう。自分のために使うことを禁じられ、公に尽くすことを償いとして。

それを与えた本人が、何故芳佳が償わなければいけないのか、何の罪があるのかすらわからずに与えた「罰」を。

去り際に娘が言った。

「罰をくれてありがとう」

私は泣きそうになりながら半ば呆然としていた。

何がいけなかった

何で娘はこうなった

私は何て事をしてしまったんだ

しかし、こうなった以上はどうしようもない。娘の見送る声を聞きながら、無理に笑顔を浮かべて、私は欧州に旅立った。

第二話

お父さんを見送った私を待っていたのは、突然泣き崩れた私を心配するお母さんやおばあちゃんを安心させる作業だった。

「私は大丈夫」と何度繰り返し返したことだろうか。最終的に子供の感情の高ぶりだと勘違いしてくれたのは幸いだった。

(騙してみたいでやだな、これ)

これからはボロを出さないようにしないと。私は気を引き締めた。

さて、私の今すべき事は何だろうか。

「未来を変える」と一言に言っても行動指針が決まらなくてはどのようなもない。とは言えいつまでも悩んでいては前と同じになってしまう。

そこで、私はその後の歴史を大きく変えうるであろう大きな事件がもう間もなく起こることに目を着けた。

「扶桑海事変…だったっけ」

1937年から始まったこの戦いは、お父さんの提唱した「宮藤理論」を使用したユニットの初陣であり、後のウィッチの戦いかたについて大きな影響を及ぼした戦いでもある…はずである。

そして私の記憶だと、坂本さんがウィッチになるきっかけになった戦いのはずだ。

私は全くと言って良いほどウィッチに関心が無かったのでうろ覚えだが、逆に言えばそんな私ですら知っていたのだから相当な戦闘だったのだろう。

だとすればそこで私というイレギュラーが戦果をあげれば流れが変わるかもしれない。

それに、これに参戦出来れば坂本さんと伝が出来るかもしれないし、坂本さんに付いていけばブリタニアの研究部隊に参加出来るかもしれない。

(このチャンスを、逃すわけにはいかない)

となれば、話は早い。戦争に参加するには軍に入る必要がある。私はウィッチの養成学校に入学することを決意した。しかし、まだ重要

なことをしていない。

それは、使い魔の契約。

私の使い魔である豆柴の形をした刀の化身、「九字兼定」は「前」の記憶通りだったなら、私が現れるまで中学校の裏山の祠にいたはずだ。その裏山は、開発でもあったのか私が契約した直後にあの祠ごと無くなってしまった（結局何の建物も建たなかった）が、契約したのは私が中学生の時だったのでまだ大丈夫だろう。

契約の決行は小学校の放課後と決め、その準備にかかった。

爽やかな新緑に覆われた鎌倉近郊の山中。そこに、一本の長い石段がある。

（鍛えてないとこの程度もキツいな…）

その石段を息を切らしながらやつとの思いで登りきった私は、「前」と全く変わっていない祠を見つけた。確か、前は私が見つけた次の日くらいに向こうからわざわざ私を追ってきてくれた。

でも今回は少しの時間も惜しいので、策を用意してある。きつとあの刀なら釣れてくれるはずだ。

「おーい兼定さん、出ーてーきーてー」

私はそう言いながら、持参した「ブツ」を祠の前に並べていく。すると、祠の扉が少し揺れたのが見えた。しめたと思いつながら今度は無意味に魔力を出し入れしてみる。すると扉の揺れが激しくなった。もう一押し、私は大人っぽい声で（難しかった）わざとらしく言った。

「あー、階段を汗かいちゃいましたー、ここなら少し身体を拭いてもバレませんよねー」

ガタンツ！と音がして、祠が『内側から』壊れた。

次の瞬間、小さな影が飛び出てくる。

（よしっ！）

戦闘により鍛えられた感覚をもって瞬時にそれを確保、つまみ上げた。

「久しぶり…いや、はじめまして、兼定さん♪」

子犬の形をしたそれは、嵌められたのを理解したのか、若干自己嫌悪の入った表情でため息をついた。が、あくまで白を切るつもりなのか、名前を呼ばれてとぼけるような仕草をして目を合わさない。

(外見だけは可愛いんだけどなあ)

まあいい、相手が大人しくこちらを見ている間に、さっさと本題に入ろう。

「単刀直入に言います。兼定さん、私の使い魔になってくれませんか？」

そう言った瞬間だった。

突然兼定が暴れだし、私の腕を抜け出した。

「え…?」

そして驚く私をよそに私の背後に回り込んだ兼定は、私の臀部を触った。

「ひゃんっ!」

と声を上げた次の瞬間、私の頭に犬耳が、臀部にしっぽがそれぞれ生えてきた。使い魔と契約した証である。そして私の頭の中に声が聞こえた。

「おい、小娘」

それは、久々に聞いた兼定の声であった。

「…今回は最初から素なんですね。あなたの事だから猫を被ると思っ
ていました。……とかいきなりすぎません？」

「私とあなたは初対面のはずだ…などという事は言わせんぞ？ 俺は
お前を見たのは初めてだが、お前の俺に対する態度は明らかに慣れ親
しんだ者の態度だ。そしてそれが嘘かどうかぐらいは見抜ける。あ
と唐突さについてはお前に言われたくない」

ああ、変わってないな。

「そうですね、私とあなたは割りと長い付き合いでしたから」

「……嘘では無さそうだな」

「まあ『女性の下着』で釣れる神様なんてあなた以外いないでしょうし
ね、兼定さん」

兼定なら引っ掛かってくれる。そう信じた私の判断は正しかった
ようだ。

「ふん、まあそれを知っているのは俺について知っている者だけだ。
それでいて膨大な魔法力を有するヤツが契約を持ちかけてきたんだ、
乗らない手はない。決して下着に惹かれたわけではないぞ」

嘘つけ。でも本当に懐かしいな、この感じ。少し泣きそうだ。

「…そういうことにおきましよう」

「あと、俺がお前を見込んだのにはもう一つ理由がある」

「……なんです？」

頭の中の犬はのびをしなから言った。

「お前なら、こいつを倒せるからだ」

その瞬間、目の前の地面が吹き飛んだ。

この地には、ある伝説がある。

曰く、かつてこの地に巨大な「怪異」が出現したという。地を荒らし天を隠し雷鳴轟かすそれは扶桑中に知れ渡り、結果何人かの巫女が集った。当時の「魔法」を使うものたちは協力して対峙。滅ぼすことこそ出来なかったものの、一角に追い詰めて封印することに成功、その守りのために、刀「九字兼定」を祠に祀ったという。

しばらくして土埃が収まり、視界が回復しはじめると、芳佳は「ソレ」に気付いた。目の前にいる巨大なソレは、色こそ銀色だが生物的外見から著しく解離した形容しがたい形をしていた。

それはまるで以前戦っていた敵のような――

「つてこれ、ネウロイじゃないですか」

それはまさしく、ネウロイだった。

何故かわからないが、あのネウロイが本土に、それも鎌倉にいた。

「何で本土にネウロイがいるんですか？」

「お前らはネウロイと呼ぶのか。俺は怪異と呼んでいるのだが」

「確か前の戦争でその名前が付けられたって聞いたことが…あ、こつちに来ましたよ」

「俺が言えた事では無いがお前はよく落ち着いていられるな…武器は俺の本体の刀で良いか？」

冷静に考えると、確かに武器は一つしかない。

恐怖を感じない訳がない。

でも、私は償いをしなくちゃいけない。

お父さんとの約束を守らなくちゃいけない。

「こんなの怖がついてはいけない」のだ。

「まあ、これより強い黒いヤツとかに慣れてますからね」

嘘はついていない。どんなネウロイだつて同じ。とにかくよけて攻撃を当てれば良いのだ。つまり「いかようにして攻撃を避けるか」「どのような攻撃が効果的か」という経験則が重要で、場数が強さに直結することを意味する。私はこの戦いを勝てると踏んだ。

「刀、使わせてもらいますよ。兼定さん」

「おう、存分に使え」

扶桑ウィッチがよく使うと言われる刀。

確かに坂本さんは刀を多用していたし、その師匠の北郷というウィッチやみっちゃんやんが教えてくれた穴拭とかいうウィッチも刀を使うと聞く。

私は主に機関砲を使っていたが、オペレーション・マルス以降は鍛錬をしていたし第二次ネウロイ大戦末期には何だかんだで多用していたので馴染みがある。

(これは倒せるな)

今回のネウロイは古いタイプということも考慮し、刀でも私なら倒せる、と判断。攻撃を始めた。

数分後、謎のネウロイとおぼしきもの発見の報を受け緊急出撃した横須賀のウィッチ隊が見たものは、抉れた地面、白い塵に成り行くネウロイと、血塗れの六歳程と思われる女の子だった。

自分の家である診療所のベッドで目覚めた私は、すぐに動こうとしてお母さんにこっぴどく叱られた。

本来なら即死級の怪我だったらしいが、魔法力による加護とお母さんやおばあちゃんの懸命な治療で何とか治ったらしい。そして、そうなった原因は火を見るより明らかだった。

六歳の私の身体で「前」の私の動きが出来るはずが無いのだ。身体的な面から、前と同じように動くのは不可能だし、そもそも鍛えてなかったと思うように身体が動いてくれなかった。むしろそんな身体でネウロイを倒し、かつ生き残っているのが奇跡的だ。

「おい、お前」

「あ、兼定さん。大丈夫でした?」

兼定が病室にきた。どうやら無事だったようだ。

「本体の刀が無事だったからな。そんなことより、お前のことだ。お前、あんな戦いかたは二度とするなよ」

「わかってますって、ちゃんと身体が動けるようになったら訓練して、身体が出来上がるまではネウロイと戦いませんから」

「本当か…? 俺にはもし今この瞬間にネウロイが出たら、間違いないお前が真っ先に出撃する姿が見えるぞ」

「いえ、本当に私は出撃しませんって」

「ほう、どうしてそこまで言えるのか聞きたいもんだ」

「だって、私がそこで死んだら私の罪を償えないじゃないですか」

「は? 罪? 何だそれ?」

「私は、罪を犯したんです。そして、その罪の償いとして、お父さんが罰をくれたんです。私の力を多くの人のために使うという約束を破

るな、という罰を。なので、私は今死ぬわけにはいかないんです。いえ、死んじや駄目なんです。だってそれじゃあ『多くの人』のために力を使えないじゃないですか」

「……確かに今すぐに死なないであろう事は解った」

「いえ、私は『罪を償っている自分』で安心したいのかもしれませんが。でもじゃあどうすれば良いんですか？　だって、今でも来るんですよ？　あの人たちが、夜な夜な私の所に来て私に言うんです、『早く死ね』って！」

「俺は知らん、それより外の奴を呼んだらどうだ」

唐突に壊れたようにしゃべりだした芳佳を見た兼定はまずいボタンを押したなーと思いつつ器用に扉を開けて部屋から出ていく。それに気付かずに芳佳は喋り続ける。

「ああ、私は罪を償ってるつもりなだけなのかもしれない、でも毎晩毎晩謝ってるしできる限りのことはしてるし何か足りないって言うんですかああごめんなさい、私に何か言う資格なんてないですねでももう無理です何も出来ませんが死ぬわけにはいかないんですヨリオオクノヒトのために私のチカラを使わないといけないんですまだ死ねないんですだからお願いします死ぬなんて言わないで謝りますからごめんなさい、ごめんなさいゴメンナサイ……」

「芳佳ちゃんー！」

ああ、私の名前が呼ばれたということはまだあの人たちが来たな、でも耐えなきや。私のせいであの人たちは

「芳佳ちゃん、芳佳ちゃんー！」

あれ、この声はあの人たちじゃない？　聞き覚えもあるし。

「芳佳ちゃん、私だよ、美千子だよー！」

「みっちゃん…？」

念のために病室を見渡す。兼定はいつの間にか出ていったようだった。

「良かったー！ 芳佳ちゃんが大怪我をしたって聞いて、もしかしたら死んじゃうかもしれないって凄く心配したんだよ！」

「あ、あはは、ありがとうみっちゃん」

「それで、芳佳ちゃん怪異を倒したんだって？——」

みっちゃんの話聞きながらぼんやりと窓の外を見る。

（坂本さんの鍛練ってどんなのだったつけ…）

やはり体を鍛えなければネウロイは倒せない。

今やるべき事は、体作りだ。

この一週間後、学校にようやく行けるまで回復した芳佳は、猛烈なトレーニングを開始する。

全ては、「償い」のために。

第三話

「人が変わったような」そんな言葉が有るが、ここ最近の芳佳はまさにそれだった。

夫が仕事で欧州に旅立つ日、見送る場で芳佳は突然泣き出し、何かを呟きだした。今思えば余りに異常な事態だったが、何でか私は動けなかった。その間も芳佳の呟きは続く。

「清佳、家に入りなさい」

一郎さんの声に私は我に帰った。

「でも、芳佳が……」

「大丈夫、安心して。私が何とかするから」

そのあとの事はわからない。

結局一郎さんが行った後に残されたのは顔に張り手の跡を貼った芳佳だけだった。

「寂しいって泣いたら、叱られちゃった」

芳佳はそれしか言わなかった。しかし、その後のあの子とは別人の様だった。

「芳佳は今日も山かい？」

「そうですよ、お母さん」

私は診療の合間の休憩をとっていた。

「……芳佳、どうしちやっただんでしょうか」

母にもはや日常となった愚痴をこぼす。この所の芳佳は明らかに変だった。

「あの子は良い子だから、いつか自分で話してくれるだろうよ」

「そうは言ってもですよ、お母さん」

「おお、噂をすれば」

母の声に外を見る。確かにそこに娘が――

「――どうしたのその傷!?!」

傷だらけで立っていた。

最近の芳佳は万事この調子だ。出掛ければ傷だらけで帰ってきて、理由を詰問すれば滝を登ったとか崖から落ちたとかそんな理由ばかり。いくら止めるように言っても勝手に行ってしまう。

(診療所があるから離れられないし、どうしたものかしら――)

私は、今日も今日とて娘を案じる一日を過ごしていた。

「おーい清佳やあ!ちよつと畑手伝ってくれえ」

「お母さん、ちよつと待ってくださーい」

今母は害虫駆除の最中だ。数が多いから手伝って欲しいのだろう。

(今年は暖かいものねえ……)

そうして、私が軍手を着けたその時だった。

『■■■■』
『!!!!』

咆哮が、轟いた。

慌てて外に出て音のした方向を見る。南方に、土煙に見え隠れする黒い巨影が動いているのが見えた。町の方でサイレンが鳴り始め、聞き慣れない爆音が頭上を通り過ぎていく。にわかには騒然とする周囲に私はついていけなかった。

(一体何がどうなってるの!?)

危険な事態であることは間違いない。動かなくてはいけないのもわかる。わかるのだが、恐怖で足が動かない。

「清佳、治療の準備を申し！」

「治療の、準備？」

私は母の声でやっと我に返った。

「何をぼおつとしとる、あれは怪異だ！ 前の大戦で戦ったモンはみんな上がりを迎えとる今、ウィッチに実戦経験のあるやつなんておらん！ 下手すると死人が出る！」

「っ！ わかりました！」

私は診療所に駆け込み、準備を始める。昼時で患者がいなかったことが幸いし、即応体制に移ることが出来た。

母の驚いた声が響いたのは、数分後のことだった。

「患者ですかお母さん！」

私は外に飛び出る。しかしそこに患者はおらず、呆然と空を見つめる母だけがいた。山のネウロイは倒されたのか、いつの間にか見えなくなっていた。

「母さん、どうしたの?」

「清佳や、芳佳は帰ってきたかい」

「えっ?」

突然の問いについ呆けた声を出してしまう。すると母は、取り乱したように聞いてきた。

「芳佳は帰ってきたかと聞いたんだよ!」

「いえ、まだの筈…あの、芳佳がどうしたんです?」

それを聞いた母は愕然とした表情をした。そして、あれを見ろとばかりに空を指差した。

母の取り乱した様子と先程の母の問いが合わさって、猛烈に嫌な予感を感じた私はすぐにその方角を見た。

そこには、ウィッチがいた。

そのウィッチたちは「何か」を抱えていた。

「宮藤診療所」の名前は軍部でも有名である。恐らく負傷者を治療させるためにウチに運んできたのだろう。

自慢ではないが、「宮藤診療所」は治癒魔法を使うので大概の怪我や簡単な病気は治ってしまう。

しかし、いかんせん狭いのと二人しか従業員がいないので重傷でない限りは他に回すように軍部には言っている。

つまり今運ばれている小柄な人影は相当な重傷を負っているということだ。

しかしそれだけならば先程のネウロイで負傷者が出たというただそれだけの事だ。一体母は何をそんなに驚いているのか。

私は不思議に思ったが、その疑問は直後に最悪の形で理解に変わる事となる。

「…清佳、担架を持ってきなさい」

「わかりまし——っ!?!」

私が担架を取ってこようとしたその時、ちょうどウィッチが人を抱えて診療所の前に着地した。

私は、自分の目を疑った。

だって、そのウィッチが運んできた人は。

その血だらけで、至るところに傷を負っている見るだけで死にかけているとわかる女の子は。

「芳佳!?!」

芳佳だった。

だがそこは戦場で経験を積んでいる母。

直ぐに普段の様子に戻ると適切な治療を始め、驚きで固まってしまった私を一喝した。

「清佳、気を張らんか！お前とアタシが治療をせんと死ぬぞ！」

「っ、はいー！」

そこからの事はよく覚えていない。

私と母は懸命に治療をし、治療魔法を交代でかけ続けた。

芳佳の体はぼろぼろだった。

そこら中に打撲傷があり、右足と肋骨は折れ、腹には穴が貫通していた。治療はとても難航した。治療魔法をいくらかけても一向に治る気配が無かったのだ。

しかし私たちは諦めなかった。

私と母は不眠不休で魔法をかけた。

そして、三日目の朝。

ようやく容態が安定した。

傷痕までは消すことが出来ず、腹に大きな傷痕が残ってしまったが、それ以上の治療は私も母も疲れきって不可能だった。

(この子は、この傷を抱えて生きるのかしら……)

最早思考も出来ず、私たちは芳佳のすぐそばの椅子で倒れるように眠りに落ちた。

北郷と名乗るウィッチが来たのはその翌日だった。

「すみません、こちらに四日前に運ばれてきた女の子はいるでしょうか。お会いしたいのです」

車から降りるなり彼女はそう言った。私は不審に思ったが、相手が嘘をついている様子も無い。母の許可を得て芳佳の寝ている前に北郷を連れていくと、彼女は芳佳にまるで謝罪するかのように頭を下げた。そしてこちらを向くと、口を開いた。

「彼女の名前は『宮藤芳佳』で合っていますか？」

「ええ、娘です。…あの、どうしてそれを？」

「……！そうですか、娘さんでしたか」

そう言った彼女は、突然こちらに頭を下げてきた。

私は慌てて頭を上げさせる。

「何をなさるのですか、何故少佐さんが頭を下げるのですか」

「そうですよ北郷さん、こちらがお礼を言うなら別だが、頭を下げられる義理はありませんよ」

「いえ、海軍としてこの事件についてこの子には感謝せねばならないことが在るのです」

「感謝するのはこっちだ、北郷さん。ウィッチが運んでくれなけりや孫は死んでた」

「そうですか、それはありがとうございます」

また礼を言う。

北郷さんは、海軍少佐なんて階級からは想像もつかない物腰の柔らかい方だなあ、と私がふと思つたほど軍人らしくない人だった。

「この子を運んだウィッチに伝えましょう。彼女はきつと喜びますよ。しかし、やはり私たちはこの子にお礼を言いたい。なにせこの子がいなければ横須賀の町は壊滅していたかもしれない。この子は、今回の事件の英雄なんです」

「北郷さん、それはどういう意味だい？」

母が尋ねる。何故この子が英雄などと呼ばれるのか私もわからない。い。

すると、長話になりますが、と断つてから北郷は事の顛末を語り始めた。

「私は教官としてウィッチを教える立場にあるのです。が、実戦経験は全く有りませんでしたし、それは部下のウィッチや他も同じでした。なのでお恥ずかしい話ながら、ネウロイ出現の警報を聞いたときには現場が混乱して出撃が遅れてしまったのです……」

——1936年、横須賀上空

「少佐、全機離陸しました」

（うーん、時間かかりすぎだな、これは）

ちらと後ろを見ると、普段よりも飛行のぶれが大きい。

訓練のおかげか編隊飛行は出来ているものの、初の実戦というものもあつて皆緊張しているのだ。

「皆、緊張するのはわかるけど、ここで倒さないと横須賀の町は壊滅する。普段通り行けば大丈夫だから、あまり気負わないように、良いか
くさ。」

「了解！」

（返事は良いんだけどなあ……）

苦笑し、前を向く。1分も飛ぶと前方に土煙が見えてきた。あれが報告にあつたネウロイだろう。部下たちも確認したらしく、編隊飛行がブレ始めた。

(こりや再訓練だな……ん?)

一度振り返り、前に向き直った瞬間。

突然目の前のネウロイが一筋の白い光とともに割れ、さらにもう一筋の光とともにそのネウロイは消滅した。

「…は？」

訳がわからない。目の前にいたはずのネウロイが消えた。何者かに倒されたと考えるのが妥当だが、こんな手早く倒すことが出来る者は部下にはいないし、自分も出来ないかもしれない。

何故倒れた？ 誰がやった？

溢れる疑問を一度消去し、ネウロイが倒された、という結果のみに注目する。

「生野、坂田は警戒にあたって。それ以外は私と共に付近の調査！」

「了解！」

念のため部下二人に警戒を命じ、それ以外の部下を連れて私は現場への降下を始めた。

すると、遠視能力持ちの部下から通信が入った。

「少佐！ 下の地表に女の子が！」

その部下の指差す所を見ると、確かに小さい赤黒い人のような物が見えた。

「こちらも視認した。直ぐに向かうぞ！」

もし本当に人なら、あの出血量では長くはもたない。

(間に合ってくれよ？ ストライカー)

私たちはまるで急降下爆撃隊のように急いで地面に向かった。

(うわあ、これは酷いなあ)

果たしてそこには、短刀を握りしめて死にかけている血塗れの女の子がいた。素人目に見ても放っておけば長くないのがわかる。

「谷町です、付近に何も見つかりません」

「吉野です、近くにこの女の子の所有物と思われる鞆が落ちていましたが、ネウロイは見受けられませんでした」

その報告を聞いて私はネウロイが消えたことを確信し、同時に目の前の子の救命が可能と判断した。

(確かこの近くには宮藤診療所があったはずだ。)

「吉野、坂田はこの子をここから南南西に行った所にある宮藤診療所へ搬送して。あと谷町、この子を「見て」くれない？」

「はっ、了解しました！」

ちょうど良い固有魔法持ちがいて良かった。彼女は触れたものの過去を見れるのだ。

何か今回の事件についてわかれば良い。その程度の認識で頼んだのだ。

「……は？ ごめん谷町、もう一度言ってくれないかな」

二日後、部下から信じられない報告がきた。

「はい、解析の結果、あのネウロイを倒したのはあの女の子であることがわかりました。武器はあの短刀、魔法力を刀に載せて叩ききったよ

うです。……私もあり得ないと思い、何度か確認したのですが、間違い無くあの子が、刀で、倒しています」

(あの子、何者なの?)

二番機であり副官の谷町が言うのだ、間違いは無いだろう。しかしあんな小さい子(所有物と思われる鞆を信じるなら「宮藤芳佳」ちゃん、年齢6歳)がネウロイを銃器も無しに倒した、なんてそう信じられるものではない。しかし、我々が倒せるかもわからないものをあの子が倒してくれたことはどうやら確からしかった。

「——もしこの子がネウロイを倒してくれていなければ、実戦経験の無い私達がネウロイを倒せたかわからない。

だから、海軍として、いや全扶桑ウィッチの声としてこの子にお礼を言いたい。ありがとう、と」

そこまで聞いた私と母はその話をとてもではないが信じられなかった。

我が家の子だから魔法力が有るであろうとは思っていたが、それを今まで発現させた事は無かったからである。

更に北郷は続ける。

「そして私は、お礼を言いに来たこと以外にもう一つ目的があつてここに来ました」

そこで北郷は一旦言葉を切った。そして深呼吸すると、

「あの子を、娘さんを、海軍に預けていただけないでしょうか」

と言った。

「娘を軍隊に……?」

突然のスカウトに私は驚いた。

「はい。何も絶対に兵士になれ、とは言っていないません。ネウロイをどうやって倒したのか、それをウィッチたちに教えてほしいのです。どうやってネウロイを倒したかあの子が教えてくれれば、人類の大きな力になり得るのです」

娘が瀕死の体で帰ってきたばかりである。相手の気持ちはわかるが、親としてさすがに首肯することはできない。

「でも、まだ娘は六つです。それにまだ眠っていますし、本人抜きで決めるのは…」

「いえ、我々もすぐに返事をくれと言うほど常識知らずではありません。一ヶ月後に私はまた来るので、その時に返事をいただけませんか」

相手は粘る。すると、母が言った。

「……わかった、少佐さん。アタシと孫と娘でよく話しておくよ。ただし、入隊する保証はないよ」

「お母さん……？」

「清佳、確かに六歳の芳佳が軍に入るのは早いと思うし、しかも芳佳は大怪我を負ったばかりかもしれないがな、あの子はネウロイを倒したそうじゃないか。もしそれが本当なら、この診療所にいるより軍に入った方が人の為になる、そうアタシは思うんよ。もちろん、あの子が目覚まして体を自由に動かせるようになったら、だがね」

母の返事に、北郷はホツとした顔をした。

「ありがとうございます、宮藤さん。では一ヶ月後に伺います。その

子が目を覚ましたら海軍はあなたに感謝している、とお伝えください」

そう言って彼女は去っていった。

その後は四日も閉めてしまった診療所の営業で大忙しだったが、私は芳佳の身を案じつつづけていた。

——二週間後。

「お母さん、行ってきます！」

「行ってらっしゃい、芳佳」

芳佳はいつもと変わらぬ様子で、回復して以来の日課となった朝の鍛錬に出掛けた。軍のスカウトの件を芳佳に話した翌日の朝だというのに、である。

芳佳は、スカウトに応じる事を決めた。即答だった。あまりに速く答えたものだから母と私で何度も尋ねたが、答えは

「お父さんとの約束を守りたいの！ 軍に入れて！」

と変わらなかった。

「芳佳がこう言ってるんだ、そうするほかねえ。それにここ20年近くネウロイとの大規模な戦争なんて起きていない、今だったら問題なかろ」

との母の言葉により、結局我が家は芳佳を入隊させることを決めたのだ。

それが昨日の夜である。

芳佳は瀕死の状態からたった二週間で傷痕は残ったものの（お腹の傷痕の事も本人は気にしていないらしい）回復して、走り回るようになった。

これも魔法のおかげなのだろうか。

（ちよつと元氣すぎやしないかしら）

なにせこのところ毎日、学校に行く前に五キロ走り、木刀で素振りをして、学校から帰つてくると腕立て伏せや腹筋を始める、なんて生活なのだ。

子供のうちからそんなことをすると体が壊れてしまう、と伝えても芳佳は聞く耳を持たない。

あのネウロイを倒したことがきっかけになつている事は間違いないのだが、理由を聞いてもはぐらかされてしまう。

前まではそんなことは無かつたのだが。

その他にも最近の芳佳にはおかしい点が多い。

この間までは子どもらしく遊んでいたのに突然自己鍛練を始めた（おかげで美智子ちゃんも寂しがっているらしい）、小学一年だというのに突然ブリタニア語の勉強を始めたり（夫の蔵書を使っているらしい）と子どもらしくない行動をするようになった。

そう、まるで人の変わったように。

（でも——）

でも、私は何も言わないことに決めた。

それは、危うくも娘が健気に努力しているからだ。

娘が頑張っていることを応援しない親がいるだろうか。そんな親はいないはずだ。だから、私は芳佳の奇行をあえて黙認する事に決めた。

（でも、もう少し安全にしてくれないかなあ）

私に今出来るのは、娘の身を案じることだけである。

第四話

——私は、暗闇の中にいる。

周りを見渡しても何も見えない。何も聞こえない。しばらくたつても何も起こらないので歩いてみる。しばらく歩いてみると、それまでの闇とは違う闇に出た。少しは周りも見えるようになる。

気付けば私は森にいた。

月は無いものの目が慣れてくれば歩ける。何でここにいるのかわからない。が、とにかくここから出よう。そう思い歩いていると、何かが足に触れた。

「何だろう…?」

触ってみる。

「ひゃつ!」

少しそれは濡れていた。驚いて手を離す。樹液か何か着いたのだろう。手に着いたものを服で拭き、暗い森の中を出口を目指して若干早足で歩き出す。しかし――

「少し疲れた…」

流石の私もこれは疲れる。体感で数時間歩きまわってもこの森の終わりが見えないのだ。暗くてわからないが、この森はどうやら雨が降った直後らしい。木や地面が濡れており腰掛けるのもままならない。もう濡れても良いや、そう考えた私は少し開けた所に出たので座り込んだ。その時だった。

風が吹いた。月を覆っていたであろう雲が飛び、辺りが突然明るくなる。やっと森の木が見えた。

「へ?」

そこには、石柱が延々と連なっていた。

それには様々な名前と様々な年月が書かれてあった。
ここに至って、私は自分が水だと思っていた物が、水では無かった
と気付いた。

私の背後には、俗に墓と呼ばれるモノが、「赤く濡れて」並んでいた。
私の手も、服も、真つ赤に染まっていた。

「あ、」

その墓たちは扶桑語とオラーシヤ語で書かれたものが大半であつたが、書かれた年月の一方だけは共通項があつた。

『1951年2月』

『1951年3月』

『1951年4月』

「あ、ああ」

私が、出撃した時期。

つまり、これは、この人たちは、私が、殺した？

後ろに人の気配を感じて振り向く。

地平線を埋め尽くすくらいのおたくさんの「何か」がいた。叫びだし
そうになるのを堪えて目を凝らすと、それはたたくさんの人だった。み
んな私を見ている。みんな何かを目で言っている。

お前が殺したんだ

お前が殺したんだ

お前が殺したんだ

お前が殺したんだ

お前が殺したんだ

ああ、この人たちは私が殺したんだ。

そうだ

そうだ

そうだ

お前が殺したんだ

皆憎しみのこもった目でこちらを睨んでいる。その重圧に気圧さ
れて、無意識に後退りを始めた私の背中に1つの墓があたる。

に勝るとも劣らない大都会―安土の街があった。

1936年6月1日、安土駅

「いやー、びつくりした。寝てたと思ったら突然叫び出すなんて思っ
てもみなかった」

私は海軍少佐で私をスカウトした北郷章香（きたごうふみか）先生
に連れられて、彼女が創設するというウィッチ隊に入隊するために舞
鶴に向かっていた。どうやら夜行列車で寝ている内に「いつもの」夢
を見ていたらしい。そして乗り換えの為に下車する安土の直前でい
つもの夢を見て叫びだして北郷先生に起こされた、という訳だ。

毎晩悪夢を見ている事がばれないように私の有り余る魔法力で兼
定に結界を張ってもらっているが、どうもその兼定が初めての列車で
興奮して結界を張り忘れていたらしい。お仕置きが必要だろう。

「ご心配をおかけしてすみませんでした。悪い夢を見てしまつて」

「や、謝らなくていいんだ。悪夢なんてそれくらいの年齢じゃ普通の
事だ、気にしなくてもいい。そんなことより、宮藤と兼定は安土は初
めてか？」

「はい、初めてです。」

「俺も初めてだな」

早速一つ嘘をついてしまった。実は「前」にも舞鶴に向かうときに
安土に来ている。まあ言い訳をすれば、あの時は外を見る気力などな
かったのでじっくり見るのは初めてだし、「前」では安土は完全に焦土
と化していた。そういう意味では活気に満ちた安土は初めてである。

高架のプラットホームから町を見ると、そこにはモダンな鉄筋コン
クリート造りや西洋風の煉瓦造りなど様々なビルディングが大通り沿
いに建ち並び、そこを路面電車やバスが走り抜ける賑やかな光景が
あった。きつと何百万もの人がいるのだろう。

ここを焦土にしてはいけない。ここも「多くの人」が暮らすのだか
ら。ここどころかこの世界全ての人も出来るだけ守らないといけな
いのだ。たった1つの街すら守れなくてどうする。

『その力を、多くの人のために使う』

お父さんがくれた罰を実行するのだ。

「おい芳佳、腹が減ったんだが」

「兼定、ご飯抜き」

「は!? 何でだよ!」

「せっかくの決意をぶち壊しにしたのと結界張り忘れた事のお仕置きだよ、兼定」

「だって列車って速いし面白いじゃないか! って芳佳やめろ! 俺を線路に落とそうとするな!」

「兼定、うるさいよ」

「はいはい、いつまでも戯れている時間は無い。まだ舞鶴は遠いぞー」

「はい、わかりました先生。兼定、付いてきてね」

「けっ、わかったよ」

私たちのホームにガツシユガツシユと力強い音を響かせながら入ってきた列車に乗り込む。

「鳥取行き、まもなく発車いたしまあす!」

威勢よく叫ぶ駅員に急かされたのか慌てて乗り込む乗客たちを待つて、チリリリリリリリリ…とやかましくベルがなる。

最後にボウツと汽笛が叫び、ガクツとした衝撃が来て、真新しい客車列車は動き出した。

列車は午前の内に琵琶湖畔を走り抜け、昼頃には京都に着き、たくさんのお客を乗せた。

さて、この列車は市内を抜けるととても美しい谷間を通る。そこで北郷先生がくれたお弁当を食べながら（温情で兼定にも少しやった）私が今後のネウロイ対策を考えていると、突然列車が、キイイイツと音を立てて急停車した。

「何かあったのかな?」

と北郷先生は言うが私はそれどころではない。扶桑海事変は来年のはずなのにこの間横須賀にネウロイが出たのだ。私の知識外のネウロイ出現があってもおかしくは無い。

「まさかネウロイっ!?」

ちようどネウロイの事を考えていたばかりだったのも手伝って、私のはこれがネウロイか何かが出たが故の緊急措置だと思ったのだ。現

に鉄の塊である鉄道は、「前」ではよく襲撃を受けていたはずだ。それは無いだろとか言ってる使い魔は放っておく。

「ネウロイ？ そんなまさか」

「何故そんな事を言うのですか？ ネウロイはいつ来るかわからないんですよ？ 横須賀の件もありますし」

「そもそも前の戦いから20年もたってるんだが…まあ良い。横須賀でネウロイが戦ったお前がそこまで言うんだ、何かあるかもしれないな」

「万が一の可能性だつてあるのだ。二人で立ち上がって窓から外に飛び出る。周りの乗客が呆気に取られているが知ったことではない。

二人で周囲を見渡す。

「宮藤、何かいたかつ」

「いいえ、北郷先生は!?!」

「駄目だ、何も見つからん」

「一旦先頭に行ってみましょう!」

「そうだな」

私たちは一番後ろの車両にいた。もしかしたら何かわかるかもしれない。

「よし、走って…おや?」

「北郷先生どうしたので…あれ?」

先生の呆けた声に振り返ると、列車が動き出していた。

それももう結構なスピードだ。どうやら二人で話していて音に気付かなかつたらしい。

「え?」

「へ?」

気付くと、北郷先生と私は溪谷の中の駅に取り残されていた。

「そのウイッチさん、どうしはったんで?」

と不審に思ったらしい駅員が独特のイントネーションで話しかけてきたので理由を説明すると、彼は笑いながら種明かししてくれた。

「ウイッチさん、この辺りでネウロイどころか怪異の話も聞いたこと

はありまへん。列車が止まったのは『タブレット』を落としたからですわ」

「タブレット?」

「そうですそうです。まあ言うなれば『列車の通行手形』ですよ。それを落としたら、列車は如何なる場合でも止まらにやあかんです」

「成る程、そういう事でしたか。みーやーふーじー?」

「すいませんでしたっ」

北郷先生がこちらを笑顔で睨んできたので反射的に謝る。

「あつはつはつは、空の上にいればわからないのは当然です。むしろウィッチさんたちが空を飛んでくれてはるから、こうして自分たちは生活できるからですわ。いや本当に感謝しとります」

何もしてないのに感謝され、私が困惑していると更に駅員は提案をしてきた。

「せや、せつかく次の列車まで間があるさかい、ここで休んでいってくださいな」

「いえ、私は遠慮しますよ。先生はどうぞ休んでください」

「おい宮藤、まだ六歳の君が休まないで私が休むなんておかしいだろう。宮藤が休まないなら私も休まんぞ」

「折角お会い出来たのも何かの縁です。お二方もそんなことおっしゃらんで、どうぞどうぞ」

私はウィッチとして敬意を払われる資格など無い。そう思って固辞しようとしたのだが、押し強い駅員に根負けし、私たちは駅員さんの厚意に甘えて列車の時間まで駅員室でおもてなしを受ける事となった。

どうやら彼の父が第一次ネウロイ大戦で従軍経験があり、彼はその時のウィッチの話をよく聞いていたのでウィッチに強く憧れていたらしい。ミカンまでいたっていて、流星石に恐縮していると、北郷先生が何かを思い出したように尋ねてきた。

「どういえば宮藤、荷物はどうした?」

あ。

—1936年6月「2日」、舞鶴

結局親切な駅員さんが取っておいてくれたのを受け取りに鳥取まで行くはめになった私は、予定より1日遅れて舞鶴に到着した。

「宮藤、次からは気を付けろよ」

「申し訳ありませんでした、先生」

「まあ良いよ。それにしても君は申し訳ありません、なんて言葉よく知ってるなあ。普通六歳が使う言葉じゃないぞ。時々思うんだが、君本当は六歳じゃない、なんて事ない?」

おっと、とうとうこの質問が来たか。

「あははー、そんなことあるわけじゃないじゃないですかー」

「何か棒読みに聞こえるが」

「おい、俺を忘れ——」

「先生、そんな事より舞鶴鎮守府ってあそこじゃないでしょうか？」

わあーやつと着いたー」

ちようどいい。鎮守府が見えてきたので話題を変えさせてもらう。

「露骨に話題を逸らすねえ。まあ良いか。さて」

というと、先生の雰囲気が変わる。先生は振り返り、私に手を差し出してきた。

そこには先程までの砕けた雰囲気ではなく、凜とした海軍軍人としての北郷章香が立っていた。

「宮藤芳佳くん、ようこそ舞鶴鎮守府、そして扶桑海軍へ。私、扶桑皇国海軍所属北郷章香少佐は君を歓迎する」

「有り難う御座います。これからよろしくお願いいたします」

私は差し出された手を握る。

「こちらこそ。ネウロイの倒しかたとか色々教えてもらおうよ?」

「はい、この宮藤芳佳、出来る限りお伝えし、人類のために役立てられるよう努力します」

やつとスタートラインに立ったと実感した。早速グダグダだった気もするがそれは一旦忘れる。

償いをするため、お父さんやあの陽気な駅員や安土で見た人々たちの命を守るため、その後の平和のため。そのためにこなさなければいけない試練は山ほどあるが、軍に入ってウィッチにならなければ何も

第五話

「芳佳ちゃん！遊ぼう！」

無邪気な声が、私の周りを跳ね回る。

「ごめんね裕子ちゃん。今日は遊べないよ」

鬱陶しい。そう本音を言っていたのはいつのことだったか。

「よく遊んでられるね。私たち、いつか戦いに行くんだよ？」

「えー、でもネウロイいないよー？」

今の扶桑は、ネウロイの驚異というものを全くもって理解していない。そして大人ですらそうなのだから、この目の前の子供が戦場など知る筈もない。

(……でも、私は違う)

私はあの戦争と、その後の悲劇を知っている。たくさんの人が死に、それ以上の人たちが悲しみに暮れた。それを覚えて、犯した罪を償う。そのために、私はここにいるのだ。

「ねえ、裕子ちゃん」

「なに!?遊んでくれるの!?!」

「もちろん！」

彼女が遊びたいと言うなら、遊ぼうじゃないか。

「やったー！はやくいこつー！」

「うん。まずは競争しよつか！」

「うん！」

1936年6月7日、舞鶴海軍付属小学校

何故こうなったのか。

私は、同期生と運動場に向かいながらそんなことを考えていた。

北郷先生は我が家に来たとき、「軍に娘さんを預けてくださいませんか」と言った。確かに私は軍に預けられ、ウィッチの養成学校である舞鶴海軍付属小学校には入学できた。

しかしまさか一般と同じく一年生に入れられるとは思っていなかった。まあ実年齢が六歳なので当然といえば当然だが、これでは開戦時に出撃優先度が下がってしまうと嘆いたものだ。

しかも、同期の人数は私含めて二人ときた。

私は今でも転校時の事を忘れることが出来ない。

その日の朝、迎えに来た北郷先生に私は学校のような施設に連れていかれた。連れていかれた先は予想通り舞鶴海軍付属小学校。しかし、六年生や五年生の教室を無視して先生は奥へと進んでいく。

「先生」

「ん？ どうした宮藤？」

「あの、教室を間違えてませんか？」

「何を言ってるんだ君は。ここが宮藤の教室だ」

見上げると「二年生」の文字。まさかと思い訊いてみる。

「私ってもしかして小学校一年生なんですか…？」

「宮藤はおかしな事を言うねえ。君は六歳だろう？」

私はてつきり即航空ウィッチコースだと思っていたのだ。新部隊とか言ってたし。

「ああ、この学校のウィッチたちこそが新部隊なんだ。それまで初等教育を受けていたウィッチたちをこの学校に集め、新しい世代を育成するのがこの部隊の目的さ」

……あれ？ じゃあネウロイ撃破方法を教えるとかは？

「先生、じゃあネウロイを倒す方法はどのようにして教えれば良いのですか？ 流石に一年生が直接教える訳にはいかないと思うのですが」

「教室とかで直接教えてもらおう訳にはいかないかな？」

「……申し訳ありません、出来ません」

「どうして？」

「どうしてって……」

悪目立ちするのが目に見えているとか、恥ずかしいとか、表向きの理由は沢山ある。だが、私が断る本当の理由はたった一つだけだ。

「文書で発表って形じゃいけませんか？」

「まあ君がどうしても、と言うなら良いけど」

「是非お願いします」

「わかったわかった。じゃあ、文書は書くから質問には答えてくれよ

？」

苦笑する北郷先生が、前を向いたその時だった。

「おっ、ちょうど良いところに。おーい！」

突然、彼女が手を振った。それに釣られて私は前を見て――

「お帰りなさい、北郷先生！」

「――!?!」

私は、凍りついた。

「私の留守中、何も無かったかい？」

「はい、大丈夫でした」

そうかそうかと北郷に誉められるその人物は。

「そうだ、丁度いいから紹介しとくね」

紹介なんて要らない。よく知っている。

「こいつは六年生の、坂本美緒。魔眼を持つてる凄いやつだ」

その後のことはよく覚えていない。私が六年生に会いたくなかった理由であり、最も会いたくなかった人に会ってしまい、混乱してしまったのだろう。気付けば私は教室に立っていた。

「さて、改めてここが君の教室だ。この時期から同期生がいるなんて珍しいんだ。どうかその仲を大切にしておいてほしい。私も航空関係の事を教えに来るからその時は宜しくね。じゃあ、頑張れよ！」

「……はい」

坂本さんのことではおっとしていた私は、どんと背中を押され、中に入った。

「初めまして、私は宮崎裕子、よろしくね！」

教室にいたのは、たった一人。そう、私の同期はたった一人しかいなかったのだ。

「ねえねえ転校生さん、あなたのお名前は？」

「……宮藤芳佳」

それが、この無邪気な同期との最初の会話だった。

「——芳佳ちゃん！っーかーまーえーたっ！」

その声に、私は現実に戻される。見れば、私の服が裕子ちゃんに掴まれている。

「よし、次は私が追いかけるから、ちゃんと逃げてね」

「うんっ！」

ふわっとしたショートヘアを揺らして逃げてゆく、唯一の同期ごと宮崎裕子（みやざきゆうこ）。

扶桑の法律では何歳だろうと魔法力が発現した時にウイツチに志願して良い事になっており、発現後に親が軍系の学校に入れることも多い。彼女もまた然り。

「おーい！もう来ていいよー！」

「ちゃんと逃げてねー！」

そして、彼女は根がとて素直だった。だから、私はそれを利用することにした。彼女を鍛えることにしたのだ。

そうすれば行く行くはエースになれるだろうし、私の背中も任せられる。多くの人を守るのだ。

「それに……」

「どーしたのー!?!」

遠くに走る彼女を見る。

（忘れてしまったけれど、私は、『前』の彼女を知っている……!）

私の中の何かが言うのだ。

『彼女を思い出せ』と。

.....

「あと一時間はやるよー!」

「おー!」

「チャンバラ五十試合!」

「おー!」

『鉄棒遊び』一時間!」

「お、おー!」

「元気にやっつてるねえ」

日の暮れた教室の窓から運動場を走る小さな二つの影が見える。北郷は微笑みながらその影を見ていた。すると、後ろから突然声がした。

「あれが我が孫の同期生かな? 北郷少佐」

「はい。——相変わらず気配をお隠しになるのがお上手でいらっしやる。司令長官」

慣れているのか北郷はこれと行って反応しない。それに司令長官と呼ばれた人物は呵呵と笑った。

「今は宮崎海軍中将と呼んでくれたまえ。で、孫の同期生はどうかね。初めて同期生が来たと言うから心配でたまらなくてな、老体に鞭うつて走ってきたわい」

北郷は、走るもなにもすぐそこが鎮守府ではありませんかと返した後、後に答える。

「見ての通り、大人びた奴ですよ。性格は真面目ですが少し何かに焦りを覚えているような節が見受けられますな。また、個人としてはあまりに膨大な魔法力を有しています」

「ふむ……固有魔法は持っているのかね?」

「強力な治癒です。計測では史上最大、真偽は不明ですが既に何回か使ったことがある、と言っています」

「……史上最大?」

決して誇張表現では無い。

「ええ。計測者によれば、コントロールも完璧で百人は連続で治せるだろう、と」

「……素晴らしい」

その時、好好爺然としていた宮崎の雰囲気が変わった。

「……どうされました？」

「なあ、シールドはどうだ？その宮藤とやらのシールド強度は？」

「強力です。陸戦と張り合えるくらいには」

「ああ、しかもシールドも大きいと来たか。フッフ、我が孫とそのような者が出会うとは運命と言っても良いかもしれん！」

どこか歪んだ歓喜の表情を浮かべる宮崎と対照的に顔をしかめる北郷。

「運命とはまた中将らしくない。まず治癒やシールドが宮崎にどんな関係が？」

「おやおや、そちらこそ聡明な少佐らしくない。我が孫の固有魔法を忘れたのかね？」

そこまで言われて北郷はやつと中将が言わんとしている事に気付く。いや、それに薄々気付いてはいたが、口には出していなかった。北郷の顔が蒼白になる。

「中将、まさか貴方は！「あ、お祖父様だー！」」

突然、甲高い声があった。二人が振り返ると裕子と芳佳が戸を開けて教室に入ってきたところだった。

「おー、裕子じゃないか！ 元気かい？」

「うん、元気ー！」

無邪気に祖父に飛びつく裕子とそれを受け止める宮崎。宮藤が遠慮がちに声をかける。

「先生、お邪魔でしたか…？」

「……いや、大丈夫だ。自主訓練は終わったか？ あんまりやりすぎても体に毒だぞ」

どうせ聞かないのはわかっているが、一応注意する。

「はい、わかりました先生」

それに、宮藤は予想通りの反応をした。こいつにも困ったものである。

「ねえねえ、どーしてお祖父様は学校に来たのー？」

「それはなあ、裕子に会いたかったからだよ！そーれ！」

「わー！ お祖父様、おーろーしーてー!!」

そんな二人を他所に、高い高いをする宮崎とはしゃぐ裕子。そこには外道で狂気の海軍中将はおらず、孫を溺愛する老人がいた。その姿からは先程の歪みは感じられなかった。

「ところであの方はどなたなんです？」

「はあ。あれでも扶桑の誇る連合艦隊の元司令長官だ」

「えっ!?!」

オラーシヤ軍兵士の回想

オラーシヤ陸軍航空隊所属、スヴァトラフ・トウイニャーノフ中尉。
彼は、俺の飛行隊の上官「だった」男だ。

ネウロイ大戦のウィッチ支援戦闘であの光線の嵐を生き残った強者、という経歴だが、普段はそんな様子は微塵も見せず、いかにもオラーシヤ人らしい酒飲みの陽気な青年といった印象が強く残っている。

彼と初めて会ったのは1950年、俺が訓練プログラムを終えて念願の戦闘機パイロットになり、ハバロフスク近郊の基地の飛行隊に配属されたときだ。

兵営の自分の部屋に入った途端、クラツカーの音がなり、そして部屋に引き摺りこまれた。

俺は早すぎる展開についていけずに、気が付いたら酒の飲み過ぎで吐いていた。

今思うと本人たちは歓迎会のつもりだったのだろうが、酒が飲めない俺は、当時は何故こんな部隊に配属されたのかと上を恨んだものだ。

しかし、数週間後にはその部隊が好きになっていたのだから、俺は良い部隊と戦友に恵まれていたのだろう。

それから2ヶ月たった。

その日の朝、その基地所属の全飛行隊に基地司令から招集がかかった。

滑走路に集合した俺たちの前に基地司令が立つ。

そして司令の告げた言葉は俺たちを大いに驚かせた。

「近々、我が陸軍は皇帝陛下の承認を受けて大規模な作戦行動を開始する。ここは、その作戦の最前線基地となる」

その言葉にその場にいた兵士皆が固まった。

驚きのあまり言葉が出てこないのだ。

—もう戦争を始めるのか。

—この間ネウロイからやっと解放されたと思ったら今度は人類ど

うしでやるのか。

恐らくその場にいた全員がそう思ったはずである。

そして基地司令の次の一言でどよめきが走った。

「我らの目標は、浦塩の占領である。諸君らの戦いに幸が多からんことを」

こんなふざけたことを考えた上層部を殴りたかった。

浦塩への侵攻となれば相手は扶桑である。

確かに最近、扶桑とオラーシヤの関係は冷え込んでいた。

しかし扶桑はネウロイ大戦中のウィッチの海外派遣とそのウィッチたちの活躍により国際社会での発言力は高く、また持ち前の技術力、南洋島等の海外領土からの豊富な資源があり、国土もネウロイに空襲こそされたが占領はされていないというどう考えてもウラル山脈以西の復興を始めたばかりのオラーシヤが勝てる相手じゃなかった。

そもそもその復興に大いに役立っているシベリア鉄道は起点が浦塩であり、鉄道車両すら満足に無いオラーシヤが扶桑の支援を受けて運行しているのだ。

この戦争に勝ち目は無い。誰が見てもそれは明らかだった。

しかし俺たちは兵士だ。上からの指示に従わない兵士は兵士ではない。

一回は軍を辞める事も考えた。

が、尊敬するスヴァトラフ中尉の参戦表明もあり、俺は軍に残った。

どうせ戦争は始まるのだ。卑怯者とは言われなくなかった。

扶緒戦争が始まった。

1951年2月、ウラジヴオストーク（扶桑側名称：浦塩）

戦争が始まって数ヶ月。火を見るより明らかだったはずの勝敗は未だつかずにいた。

その原因は、腐つても大国であるオラーシヤの速度重視の強襲による浦塩の失陥と、扶桑側の大きな誤算にある。

「ウィッチが使えなかった」のだ。

ウィッチを戦線に投入できれば、長く続いた魔女を悪とする思想による慢性的なウィッチ不足により、それを戦闘機兵力で補うしか無かったオラーシャは容易く破れる。

そう考えた扶桑海軍は早速ウィッチ隊を投入した。

しかしその目論見は失敗に終わる。

ウィッチの力は個人の精神に大きく左右される。

まだ十代の少女は人を撃てるほど心は強くない。

結果的に本能的なシールドで敵は防げるものの、人を撃とうとする魔法力がストップし飛べなくなってしまう少女が続出した。

そしてウィッチが使えないとなると、長らくウィッチに依存してきた扶桑とウィッチ不足のため戦闘機開発が進んだオラーシャでは扶桑の分が悪く、迎撃に出たオラーシャ軍による空母天城の喪失という予想外の大損害もあり、扶桑は浦塩の早期奪還を諦めざるを得なかった。

航空兵力の均衡による戦線の膠着により、扶緒戦争は小康状態となっていて、俺たちの飛行隊もここ2週間の任務はやってくる扶桑海軍機を探すの哨戒のみという戦争をしていることを忘れそうになるほど静かな日々が続いていた。

ある日、俺と同期のセギーリョフ少尉が共にランニングをしていると、スヴァトラフ中尉が声をかけてきた。

「よお、お二人さん。今日は暇かい？」

「はっ、本日は非番であり予定はありません、中尉」

「自分も予定はありません」

相変わらず固い返事をする同期に苦笑しつつ、自分も暇である旨を伝える。

「よし、ヴォッタ・ヘルマ』（まるでヘルマのような）とヴォッタ・ヨシカ』両少尉、俺と町に行くぞ！」

彼は大のウィッチ好きで、部下に性格や飛びかたが似ているウィッチの名前の渾名をつける癖があった。

ただしウィッチは皆女性であり、必然的に付けられる渾名も女性名になるのでこの渾名の命名基準に異を唱える者もいたが、俺はこれを

気に入っていた。

世界の守護者たる彼女たちの名前に恥じぬよう頑張れるからだ。……さすがにあの英雄、宮藤芳佳の名前がつくとは思っていなかったが。

ちなみに扶桑と交戦中なのにその名前はどうか、と以前聞いたところ、「ウィッチはネウロイとしか戦わないから良いんだ」との返答が返ってきた。閑話休題。

「了解しました、中尉」

「良いですね中尉、行きましょう！」

こうして、俺たちは中尉と出かけることになった。

中尉の運転する車は基地から出ると数分でウラジヴオストーク（東の占領地の意。オラーシヤ政府が名付けた）の町に着いた。

上空を飛んだことはあるものの、俺たちはその町に来るのは初めてだった。

町の入り口の検問を抜けて中に入る。

しばらく走ると視界が開け、扶桑式の美しい街並みが広がった。

そこには煉瓦造りの官庁以外は木と紙で出来た珍しい建物が並んでおり、そのオラーシヤでは見られない風景が今でも印象に残っている。

中尉が車を走らせながら話しかけてきた。

「扶桑の町ってのはみんなこうなってるらしいぜ。綺麗っちゃ綺麗だが俺の生まれた所の家と比べると脆いよなー」

「自分はこのような耐火性の無い家に住みたいとは到底思えません」

「そうか？ セギーリヨフ、俺は中尉が言うように綺麗だと思いがな。というか中尉はモスクワ生まれですよ？ 流石にモスクワとここを比べるのは扶桑側に酷じやないですか？」

「ハッハッハ、確かに天下の大都市、モスクワに比べちゃ可哀想か。モスクワは良いとこだぞ？」

「俺はモスクワに行ったことが無いので羨ましいですよ」

「そうか、じゃあ両少尉は今度戦争が終わったら、俺の実家のパンをくれてやるからモスクワに来い！」

「自分もですか？　しかし自分は…」

「ありがとうございます！　中尉、セギーリヨフも連れてきますので！」

「よし、これは命令である！」

そう言っつて中尉は笑った。

俺たちも連れられて笑う。

それが、扶緒戦争中の最後の休日だった。

そして、その命令が果たされることは無かった。

ある日、珍しく警報が鳴り、ちょうど担当だった俺たちの飛行隊は迎撃に飛び立った。

天気は快晴。

敵は海上を単機でウラジオストックに向けて北上していた。

何故単機で来るのか扶桑側の意図は不明だが、強行偵察だと司令は判断した。

しかし、いくら行ってもその単機が捕捉できない。

レーダーには直ぐそこにいると表示されているのに、全く捕捉できないのだ。

誤表示か故障を疑い始めた時だった。

突然隣のスヴァトラフ中尉の機体が「消えた」。

「…!?!」

あまりに突然すぎて何が起きたのかわからなかった。

何か空が赤く光ったと思ったら、彼が文字どおり消えた。

影も形も無くなったのだ。

呆気にとられていると、さらにその隣のセギーリヨフの機体も消えた。

「あれは!?!…っ撤退！」

「?!隊長、何を言っつてるんです！　今、中尉が、セギーリヨフが、消えたんですよ!?!」

「うるさい！　隊長命令だ！　撤退！」

何かに気付いた飛行隊長は撤退を指示した。

撤退を始めた我々には光は来なかったが、そんなことはどうでも良

かった。

スヴァトラフ中尉とセギーリヨフが死んだのだ。

俺は呆然としており、気付かなければ基地上空を通りすぎるどころだった。

帰投すると隊長に休むよう言われた。

その隊長は、司令室に入ったつきり数時間出てこなかった。

次の日、飛行隊の皆で二人の別れの会を行った。

スヴァトラフ中尉。

24歳で、実家は復興を始めたモスクワでパン屋を経営していて、よく後輩の俺にもパンをくれた。

常に人懐っこい笑顔を浮かべた陽気な人だが、戦闘技術は部隊の中でも隊長を除けば一二を争う腕前だった。

セギーリヨフ少尉。

23歳で俺と同じ年だった為何かと行動を共にすることが多かった。

すこし堅苦しいが飛行の才能はピカイチで、それはいずれはエースになると言われるほどのものだった。

二人とも、もう共に飛べないのだ。

俺たちは酒を飲みながら二人の思い出を語り合い、大泣きした。

飛行隊長も参加してくれて、泣きこそしなかったが、とても無念そうにしていた。

彼とスヴァトラフ中尉はネウロイ大戦以来の戦友だったという。

そして、平穏な日々は終わった。

毎日のように誰かが落とされる。いや、消される。

「昨日はあの大尉が墜とされたらしいぞ」

「一昨日なんてモスクワからの慰問楽隊が輸送機ごと…」

「噂じゃ娘さんはあの…」

「俺の同期もあの光にやられた！ 畜生！」

「あの光はネウロイの光だって話が…」

「はあ!? 扶桑とネウロイと両方戦えつてののか!？」

ネウロイ大戦が終わってまだ一年と半年程だ。

あれはネウロイの光線なのではないか、と噂になるのも無理はなかった。

その噂が気になった俺は、ネウロイ大戦の生き残りであり、あの日何かに気付いていた隊長に尋ねた。

「隊長、隊長はあの光はなんなんですか？ 自分にはネウロイの攻撃に見えて仕方が無いのです」

しかし隊長はその問いを一蹴した。

「馬鹿言え、あれがネウロイの訳あるかよ」

「では何なのです。あんな兵器、私は見たことがありません」

「俺は見たんだよ。あの出撃の時、倒すはずだった扶桑機を」

「？ いくら探しても見つからなかったじゃないですか」

「戦闘機や爆撃機を探してたらそりやあ見つからねえよ。でもな、スヴァトラフの機体が墜ちた時、俺はあの光の先端に『女』を見たんだ。

ありやあウィッチだ。扶桑のウィッチにあいつらは墜とされたんだ」

確かにウィッチだとしたら見つからないのは道理だ。肉眼で探すには小さすぎる。しかし…

「扶桑海軍はウィッチの戦力投入を諦めたのではなかったのですか？」

そうだ。

確かこの戦争の初期にウィッチを実戦投入したときはウィッチは使い物にならなかったはずだ。

「何で扶桑がウィッチを使っているのかはわからねえが俺の目は確かだ。あれはウィッチだったし、あの光を撃つたのもウィッチだった。これはかなりマズイぞ。ここだけの話、上はリトビヤグ大尉やポクルーシキン少佐みたいな著名なウィッチを召還してテストしたらいいんだが、やはり使えなかったらしい。少なくともあれの対抗策が出来るまでは俺たちはヤツの良的だろうな」

その後、飛行隊長の予測通り、扶桑海軍は正式にあの光はウィッチの攻撃であると発表した。

扶桑の発表によるとあれは魔法力を用いたレーザー兵器であるらしい。

何という皮肉だろう。

ウィッチが大好きだった上官はウィッチに撃墜されたのだ。

かつて俺は何故ウィッチが好きなのか彼に訊いたことがある。

「何で俺がウィッチを好きかって？ それはな、憧れだからだよ」

「憧れ、ですか」

「そうだ。オラーシャがこの戦いで扶桑に健闘出来ているのは、ひとえにウィッチが使えないからだ。ウィッチは対人戦闘に使えないっていうのは実はネウロイ大戦中から言われてたことなんだ。それを俺は軍学生の頃に聞いて、とても羨ましいって思ったんだ」

彼は人に銃を向けず、政治に利用されず、一騎当千の力で自由に空を飛び、人類の敵とのみ戦うその幼き人類の守護者に憧れたという。

そんな男の最期がウィッチによる撃墜である。

しかも、扶桑の発表によるとそのウィッチは「宮藤芳佳」らしい。

ネウロイ大戦終結の英雄。

スヴァトラフ中尉が俺につけたあだ名の由来のウィッチ。

彼曰く「彼女の本当の魅力は戦闘ではなく、その心優しい所だ」とのことだが、それは嘘っぱちだ。

そんなウィッチが何故人を殺せる。

数多の軍人を殺してなお飛び続けられるということは、彼女は殺すことを何とも感じていないと言うことだ。

そんな奴が「心優しい」訳がない。

いつしか俺は、宮藤芳佳を殺そうと考えるようになった。

俺は、積極的に出撃するようになった。

しかし、宮藤は出てこない。

正確には俺が出撃する時に限って彼女がいないのだ。

いつの間にか俺はエースになっていたがそんなことはどうでも良かった。

俺は彼女を探し続けた。

そうして3ヶ月がたった。

—1951年5月23日ウラジヴォストーク上空

この日、俺はまた迎撃の為に空に上がっていた。

この日の扶桑側の機体数は10機。こちらは13機で、直ぐに終ると思われた。

しかし、湾の上空で俺が乗った機体のエンジンが異音を出し始めた。

俺が抜けてもこちらは12機。司令部も問題ないと判断したので、管制塔から帰投の命令を寄越してきたので仕方なく引き返している途中だった。

突然、悲鳴が聞こえ、仲間の無線が途絶した。

管制塔に問い合わせてもあやふやな答えが返ってくるだけだった。

あの魔女だ。宮藤がやったんだ。

しかし機体が故障している俺にはどうすることも出来ない。

今死んではヤツを殺せない。

悔しい思いをしながら基地に向かって低速で飛んでいると、レーダーに後ろから飛んでくる飛翔体が写った。

何だ？

こんなところを飛ぶやつがいるのか？

そう思い、後ろを振り向いても飛行機の姿は見えない。そしてレーダーの表示が俺の機体を追い越した時だった。

「え？」

上空に、あの魔女がいた。

ユニットのエンジンは止まっているらしく高速で滑空しつつ地面に向かっていている。

「あれはっ……！」

今がチャンスである。

照準を覗いた。

すると、彼女の顔が見えた。

もう23歳であるはずで、かつ歴戦のエースであり仇敵だが、そうは見えない幼い顔に安らかな眠るように閉じられた目。

——何だ？ あれは。

——まるで、ただの女の子じゃないか。

何か自分が大きな勘違いをしているような気がして、銃を撃つのを

躊躇った瞬間。

彼女は、俺の前を通り過ぎ、地面に激突した。

憎んでいる敵は、あっけなく、歴戦のエースにしてはあまりにもあっけなく、墜ちた。

その後帰投した俺は、車を駆けて彼女の死体を探し回った。

そして基地から数キロ離れた静かな森の中で彼女の死体を見つけた。

墜ちるとき最期のシールドが無意識にはられたのだろう、彼女の顔や足には傷ひとつ無く、墜落したというのに顔には笑みさえ感じられるような表情が広がっていた。

仇敵であるはずなのにとても神聖なものであるように感じた俺は、その死体に花を手向け、基地に帰った。

その後――

「あなた、あなた、起きてくださいな。まだ昼寝には早いですよ」

2001年8月30日、オラーシャ共和国モスクワ郊外

「もう、今日は大事な日だって私に出掛ける用意までさせたのに、あなたは昼寝ですか」

「いいじゃあないか少しくらい。お前、歳とって口うるさくなつたな」

「何を言うんです。頑固で口うるさいのはそつちじゃないですか」

ああやかましい。

今日くらい昔を思い出したって良いじゃないか。

愚痴りながら外行きの服に袖を通す。

つけっぱなしのテレビからニュースキャスターの声が聞こえる。

「――ネウロイ大戦後、最初の人類国家間戦争、扶緒戦争が終戦してから今日で五十年を迎えます。それを記念して扶桑・オラーシャ共同慰霊祭が扶桑皇国浦塩市にて行われ、我が国からはプ――」

あのウィッチが墜落した後、扶緒戦争は劇的に動いた。これは後になってわかった事だが、あのウィッチが我らの航空隊から制空権を奪還し、その隙に勃海から上陸し、準備を整えた扶桑陸軍が背後からウラジヴォストークを強襲、扶桑海からの扶桑海軍機動艦隊による航空支援によりウラジヴォストークを奪還、というシナリオを扶桑は描い

ていたらしい。

それがあのウィッチの墜落によって駄目になってしまった。当時の扶桑大本営ではウラジヴオストークを諦める声すら聞かれたらしい。

が、その時大きく事態が動いた。

扶武同盟を理由にシベリアの資源が欲しいブリタニアが、発言力と戦勝国という立場が欲しいリベリオンと共に協力を申し出たのだ。その三方国の圧倒的な物量攻撃を前に軍備がまだ整っていないオラーシヤ軍は潰走。

私の部隊は撤退を支援せよとの命を受け、基地から基地へと転戦を続けた。

しかし、いくら私たちが奮闘したところで物量の差は如何ともし難く、シベリア鉄道を輸送に利用した三方国が瞬く間にバイカル湖まで辿り着いたのと同時に我が軍も行動を停止した。ついに戦費が底をついたのだ。結局直後の皇帝自らの声明により1951年8月30日をもって我がオラーシヤは降伏、戦争は終結した。

あれから五十年。

本当に長く、大変な五十年だった。

バイカル湖以東の譲渡や皇帝制の廃止等が盛り込まれたバイカル条約により打ち立てられた新生オラーシヤ政府は、前々皇帝の進めたヨーロッパオラーシヤの復興計画を引き継ぐ事を決定。

軍縮で浮いた費用を全て注ぎ込む勢いで計画を遂行した。

しかし、軍縮は思わぬ弊害を招いた。

それまで維持していたオラーシヤの影響力が突然に小さくなったことで民族運動が活発化したのだ。

もとより多民族国家だったオラーシヤは力によってそれらの分裂を抑えていたが、戦争で弱体化し疲弊したオラーシヤにそれを止める手だては無く小国が次々と独立。

その過程で生まれたのは幾つもの小競り合いと大量の犠牲者だった。

オラーシヤはどんどん小さくなった。

最後に残ったのは最盛期の領土とは比べ物にならないほど小さい領土。

しかし、疲弊したオラーシヤはその領土を維持する事が精一杯だった。

国民は小さくなったオラーシヤで復興のために懸命に働いた。

その大きな助けとなったのは軍縮で仕事にあぶれた兵士たちと、ストライカーを知らないウィッチたちだった。

最低限の軍隊を所持するので精一杯なオラーシヤにとって、平時には何の役にも立たない航空及び陸戦ウィッチ部隊の維持・運用など不可能だった。

しかし万が一のためにウィッチたちを固めておきたい。

そこでオラーシヤが採った苦肉の策が、ネウロイ大戦の英雄、ポクリーシキン中佐をリーダーとしたウィッチたちの復興支援部隊だった。

魔法力を発現させれば強大な力を出せるウィッチたちの復興支援は大きな成果を挙げ、また古くからオラーシヤに根付いていた魔女を悪とする思想を払拭する事すら成し遂げた。

そうしたウィッチと国民が協力した復興計画の結果、オラーシヤはネウロイ大戦前の生活を送れるようになるまでに復興した。

今では数十年前にネウロイによって平らにされた土地には作物が実り、ネウロイによって廃墟にされた都市にはビルが建ち、人々が平穏な生活を送っている。

「あなた！早くしてくださいな！」

あの口うるさい妻も四十年前は上ガリを迎えたばかりの可愛いウィッチだったのだ。まったく時というものは残酷である。

ニュースは続く。

「——また、本日正午には当時のストライカーによる展示飛行がモスクワにて——」

2001年、モスクワ、クレムリ宮殿前広場

ゴオオアッ！と爆音を立てて高速のジェット戦闘機やジェットストライカーが幾つも幾つも飛び去っていく。周囲の観客が歓声を上

げるが、私は早く「アレ」が来ないかと思いつながら空を見上げる。

すると、今までの物とは明らかに違う音を立てるストライカーが来た。それを見たとき、私の心は大きく湧き立った。

ブウウウウン…とレシプロ特有の音を響かせながらゆつくりと飛ぶ一つのストライカーと一つのレシプロ戦闘機。

片方は、帝政オライシャ陸軍航空隊塗装のレシプロ戦闘機。私が乗っていたのもこの戦闘機だった。

そしてその傍らを飛ぶストライカーは、かつて目の前で墜ちていった扶桑海軍旧塗装の大型戦闘脚。——宮藤芳佳が駆った機体だった。

あの光景を再び思い出す。

木陰でまるで眠るように安らかに死んでいたあのウィッチ。

彼女がこの光景を見たらどう思っただろうか。

あの時は宮藤を冷酷な敵としか考えていなかった。

しかし家族を持ち、娘を授かり、孫すら産まれた今は疑問の方が強い。

彼女は本当に冷酷だったのだろうか。

私の仲間を殺した時、本当に何も感じていなかったのだろうか。

…それは死んだ彼女にしかわからないのだろうか。

宮藤芳佳の機体が夏のモスクワを飛んでいく。

その光景が五十年前の五月末のウラジヴオストークと重なる。

スヴァトラフ中尉、セギーリヨフ少尉、慰問楽団長、飛行隊長…

死んでいった彼らは上で宮藤と会ったのだろうか。

もし会っていたとしても、どうか争っていませんように。

せめて死後だけでも、安らかでありますように。

私は、そう願わずにはいられなかった。

扶緒戦争の流れ（投稿し直し）

① 扶桑海事変で大陸扶桑領（ストライクウイッチーズ零の地図を見る限りバイカル湖東岸辺りまで）の多くが失われる。時期と起点を考えるとシベリア鉄道も扶桑が敷設？

② この時の領土失陥で扶桑は浦塩を除く多くの大陸領をオラシヤに譲渡？（ストライクウイッチーズ世界の地図によるとこちらのウラジオストクが浦塩なのにハバロフスクはそのままため外国領となっていると思われる）

ただし第二次ネウロイ大戦時に扶桑ウイッチによるウラル防衛戦闘が行われているため、依然影響力は強いと思われる。

③ 第二次ネウロイ大戦の開戦により、扶桑皇国は陸軍がシベリア經由の東部戦線、海軍が艦隊による西部戦線の支援をそれぞれ行う。またヨーロッパオラシヤの失陥により大量の難民がウラル以東の極東オラシヤに避難している。このため、シベリア鉄道や周辺道路で扶桑とオラシヤでいざこざが頻発するようになり、若干扶桑不信が進む。

（ここからオリジナル）

④ 何だかんだで第二次ネウロイ大戦終戦。世界の国は、

広大な荒れ地が広がる国

カールスラント

ヨーロッパオラシヤ

オストマルク

ダキア

オストマン

モエシア

ギリシア

ペルシヤ

甚大な被害を受けたが本土は占領されなかった国

扶桑

大平洋岸アジア諸国

少し復興が進んだ国

ガリア

ベルギガ

ネーデルランド

ヴェネチア

侵攻をあまり受けなかったほぼ無傷の国

スオムス

バルトランド

ブリタニア

ヒスパニア

ルシタニア

ヘルウエティア

ロマーニヤ

南北リベリオン大陸各国

の4種に分類出来るようになる。

⑤オラーシヤ、皇帝の発案で終戦直後から隣国がスオムスを除いて荒地地になつて利用する事を利用し、その国民や政府がアフリカや南リベリオン等の疎開先から帰ってくる前に一気にヨーロッパオラーシヤを復興させて海外からの復員を待つて復興させねばならない隣国に対し影響力を持たせる、という「オラーシヤの光」政策を開始。

⑥そのカバナーのためにオラーシヤ政府はシベリアで資源開発を推し進める。その過程で同じく戦災からの復興と発展のためにシベリアの資源が欲しい扶桑と対立が生じる。

⑦扶桑が、起点が扶桑領であり、扶桑時代に作られ、戦時中も扶桑が運行したとして、シベリア鉄道の扶桑国有化を主張。もちろんオラーシヤがこれを受け入れるハズは無いことを扶桑も知っているの
で空母機動艦隊を浦塩まで「練習航海」させた上で折衷案として

1、扶桑に対して年利益の5割を支払う

2、シベリア鉄道に対して車両や運行等を扶桑が支援する

という「鉄道協定」の締結を要求。オラーシヤはこれに同意せざる

を得ず、シベリア鉄道経営に扶桑が介入。またかつて扶桑領だった場所や大戦中に扶桑軍がウィッチによって防衛していた場所など扶桑に対して良い感情を持つ人が多い地域に扶桑がスパイを送り込み、親扶桑運動を煽動して選挙で親扶桑派の議員を当選させる等してシベリア鉄道の沿線地域を影響下に置くことに成功する。

そして「オラーシヤの光」政策が成功すると地理的要因から東部ヨーロッパに影響を及ぼすのが難しくなるということでブリタニアが扶武同盟を理由に扶桑を支持。

しかし「オラーシヤの光」政策とそれに伴うシベリア開発に大量の予算が必要になり（これはシベリア鉄道が扶桑の影響下であり、本来の数倍の予算がシベリア鉄道に回されていたことも原因になっている）ネウロイ大戦でボロボロにされた軍備を回復するだけの予算が足りず、シベリア防衛がオラーシヤ独力では難しくなってくる。（これまで皇帝に対して知識人や学のある貴族等が再三「オラーシヤの光」政策の中止を進言していたものの、皇帝はブリタニアやリベリオンの支援の下に完全に復興したカールスラントは脅威であるとの考えからこれを拒否していた）

⑧そのタイミングで扶桑は旧大陸領の防衛の負担をオラーシヤと扶桑で分担することを申し出る。またその見返りに扶桑、旧大陸領内の鉱山などに対して扶桑人の血と汗で作られたとして経営への介入を要求。しかしオラーシヤ議会はこれを受け入れる訳にはいかないと扶桑の要求を拒否。

これを受けて扶桑は政府が「数年前まで住んでいた土地の鉱山をオラーシヤは勝手に使っている」と国民を煽っていたので世論は反オラーシヤに傾く。

⑨その最中、オラーシヤ皇帝ピョートル二世死去。新しくオラーシヤ皇帝となったドミトリー一世は父が無理に推し進め、国庫を逼迫させ扶桑の内政干渉を招いた「オラーシヤの光」政策を徹底的に批判、政策の撤回を宣言。扶桑ぎらいを公然と宣言し露骨な扶桑批判を開始。扶桑とオラーシヤ間の関係は猛烈に冷え込む。ただし父の政策の影響で財政は厳しく、扶桑の影響は排除しきれなかった。しかしオ

ラーシヤは財政的に大きい行動は出来ないと判断し、特に対策はしなかった。

⑩オラーシヤ、扶桑に前皇帝が潜らせていたものの有効活用していなかったスパイを使い、シベリアの奥地にネウロイ出現の虚偽情報を扶桑政府に流し、また実際に一部の陸軍部隊（オラーシヤ基準）をその虚偽情報の場所に向かわせた。それには情報の信憑性を持たせ、またその場所に釣られてくる扶桑陸軍を殲滅する目的があった。ネウロイ大戦が終わった後の軍備の再編中だった扶桑は、ここでネウロイがシベリアに発生するとまた本土に攻撃を受ける可能性があったためオラーシヤの目論見通り援軍到着までの間に合わせとして浦塩の陸軍を出撃させた。そして浦塩の防備が手薄になった時を見計らってオラーシヤは扶桑に宣戦布告、ハバロフスクの大量の陸軍を浦塩に向けて進撃させ電撃戦を行い、大きな損害を受けずに浦塩を占領。また誘き出された扶桑陸軍の浦塩守備隊もオラーシヤ軍により壊滅的な被害を受けた。

⑪扶桑政府は突然の宣戦布告と浦塩占領に混乱するも、その翌日には舞鶴のウィツチ隊の派兵を決定、空母天城所属のウィツチ隊が出撃した。ここで浦塩の制空権を取り返し、陸軍の上陸と司令部への空襲を行う予定だった。

⑫ウィツチ隊、出撃するも一切使い物にならず、逆に迎撃のオラーシヤ陸軍機による攻撃の第一波で制空権を喪失、空爆隊による第二波で空母天城、駆逐艦秋月、照月の三隻が轟沈、艦隊は撤退する。

⑬扶桑海軍、起死回生の策として宮藤芳佳の利用を画策。診療所と親しい友人の家付近に陸戦隊を配置した上で脅し、半ば脅迫に近い形で宮藤芳佳、参戦を承諾。大本営はこれを受け、浦塩奪還作戦を立案。それは宮藤芳佳と少しの戦闘機隊で完全に浦塩上空の制空権を確保し、その間に要塞と化した浦塩を避けて空母機動艦隊の援護を受けながら勃海から上陸した陸軍が回り込むものだった。これはこの時期、オラーシヤの全航空隊の三分の一もの航空戦力が浦塩周辺に配備されており、通常の航空機ではとても制空権を取れなかったためである。

⑭扶桑軍、勃海沿岸の荒莫地帯に拠点を設営、戦力の輸送を開始。

⑮3ヶ月後、扶桑陸軍が戦力集結を完了。荒莫地帯から抜け、一気に浦塩に向けて進撃を開始。しかしこのタイミングで宮藤芳佳が墜落死との報が入り、陸軍は荒莫地帯を抜ける直前で慌てて移動を止める。

⑯制空権の無い中の攻撃は自殺行為のため、大本営内部で議論が発生。結果的にオラーシヤ軍の戦力増強の隙を与える。

⑰これまで傍観していたブリタニアが扶武同盟を理由に参戦。ブリタニア側からすればここでオラーシヤに勝てば戦勝国としてオラーシヤに強く出れるだけでなくヨーロッパに対する発言力が上がり、また扶桑としても宮藤の墜ちた今、航空戦力を何があっても欲しかったので利害が一致したからである。またネウロイ大戦中にウィッチをあまり派遣しなかった事で発言力が低下していたリベリオンもシベリアの資源と戦勝国という立場を求めて参戦し、ここに扶・武・利三国の連合軍が完成。

⑱1ヶ月後、この連合軍の完成を受けて陸軍部隊も移動を再開。扶・武・利三国の空母機動艦隊による連日の空襲と背後からの陸軍による奇襲で完全に浦塩は包囲され、浦塩のオラーシヤ司令部は降伏。また奪還した飛行場からハバロフスクへ連合軍は攻撃を行い、それに合わせてシベリア鉄道を利用して陸軍が進撃。最終的にバイカル湖東岸までを占領する。

⑲この時点でオラーシヤは資金も士気もドン底の状態であり、とても戦争を継続出来なくなつたため皇帝が停戦を指示し降伏を宣言、1951年8月30日、戦争が終結。

⑳最終的に以下の条文からなる「バイカル条約」をオラーシヤと連合国が締結。

・シベリア鉄道は扶桑、ブリタニア、リベリオンの共同管理下に置く

・オラーシヤのバイカル湖以東を三国が分割する

・オラーシヤは皇帝制を撤廃し、元首を大統領とする連邦共和国政府を新設する。

・オラーシヤは3か国に賠償金を支払う

第六話

「上は正気なのか!？」

口に出してしまっただけからはっとして周囲を見回し、誰も居ないことを確認。

(こんなのを採用するなんて。一体何を考えている……?)

海軍少佐・北郷章香は心の中でその日何度目かわからない溜め息をつく。

一般的に見て満十八歳の彼女には不釣り合いなほど立派な執務机。お世辞にも整理されているとは言えないその机の真ん中に妙な存在感を持って置かれている軍極秘の指定印が捺された書類こそ、彼女の悩みの種だった。

その書類には、こう書かれていた。

『飛行型ネウロ口大大陸発生時ニ於新戦術並ニ其ノ訓練計画』

.....

「宮藤ちゃん、計測はあと三つ程ですから、疲れているだろうけどがんばってね」

「問題ありません、先生」

明日は固有魔法を使ったテストを行う。

昨日の教室で私と裕子ちゃんの二人に北郷先生が告げたそれは、「前」の時に行っていた検査ときほど変わらない内容だった。

「次のテストは、どれだけ速く治癒魔法を展開、使用できるかです」

「はい、わかりました」

これまでやってきたのは、体力強化の及ぼす影響の検査、ストライカー（飛行は出来ない）を履いたシールド展開の可否と強度の検査、治癒魔法を用いた様々な検査等々。

「前」と違う所を強いて挙げるなら、治癒魔法の検査項目に速度を測るものが多い所だろうか。しかしこの手の魔法は素早さが命、不自然な点はない。ちなみに被検体は地元の病院に怪我や病気で診察を受けに来た人たち。もちろん軍が謝礼は払うし、本人の了承も受けていると聞いている。

「では、始めてください」

その声とともに即座に魔法力をコントロールし、治癒魔法を発動する。

既に5名に治癒魔法をかけているが特に疲労は感じない。

(あの大和の時と比べれば全然軽い)

それにこの程度で疲れてしまっていてはあの人たちの分なんてとてもじゃないけど償いきれない。

(ん?)

誰かの視線を感じた私は振り返る。

「どうかしましたか?」

「……いえ、何でもありません」

そこには先生以外誰もいなかった。確かに何か感じた気がしたのだが。

(集中力が切れかかっているな)

更に集中する。結局魔法をかけ始めて20秒もしない内に、階段から転げ落ちて足を骨折した鈴木トメさん(61)の足は元通りになり、ついでに腰痛も治っていた。

1時間後。

私は全ての検査項目を終え、基地の外周を走っていた。

(あと5周くらい行けるかな)

治癒魔法の速さが予想以上だったらしく、検査が早く終わってしまい時間が余ってしまったからである。

(でも、もつと速く出来た筈だ)

魔法というものは繊細に扱って無駄を省かなければ余計に時間と魔法力を消費する。では繊細に扱う為にはどうするか?

私はその方法を既に師である坂本さんに教えてもらった。それが自己鍛練だ。

自分を律することが出来れば魔法も必然的に律することが出来る。彼女は、自分が二十歳を超えても烈風丸なんて代物を扱えたのはそれが理由だと語っていた。だから私もそれに倣って鍛練をしている。

骨折ごときで20秒もかかってしまうようでは私もまだまだ集中力が足りない。これじゃあ何人もの重傷者を相手にした時に対応出来ない。

(体力にはまだ余裕があるな…)

一周を終えても体力は有り余っていた。事変が始まっていなかったのうちに鍛えておきたいし、走る距離を延ばすこととしよう。

「よし、残り6周に変更し——っとうわっ!」

ゴン!!

——チカチカと光が見える。

痛い。めちやくちや痛い。特に頭が。

「いってて…」

痛む頭をさすりながら起き上がる。

それと同時に目の前の私がぶつかった物の正体がわかった。

「これは…飛行機?」

何故こんな砂浜なんか置いてあるのかはわからないが、それは黒い色の飛行機だった。

ん? この黒地に赤い斑点塗装、どこかで見たことがあるような

「おーい、芳佳ちゃん」

おや、この声は。

「芳佳ちゃん、こんなところで何してるのー!」

同期の裕子ちゃんがこちらに飛び付いてくる。この子は人に飛び付くのが癖のようで、私もいつも付き合っているのでその対応にも慣れていて。

「走ってたところだよ、裕子ちゃんは?」

裕子ちゃんを抱き止める。

あれ、これって私は子供をあやす感覚でやっているのだが、よく考えれば端から見れば変な行為なのでは? いや、微笑ましく見えるのかな?

「えーと、『こゆるまほー』のてすとで『これ』をうごかせって言われて、うごかしたらもうきょうはおわって良いって言われたの!」

「へー…えっ?」

彼女が「これ」と言つて指差すのは先程の妙な色の飛行機。

「この飛行機を動かせるの？」

「うん！でも『せいぎよ』まちがえちゃったの。本当なら、ちがう所のはずだったんだよー」

そう言つて彼女は少し残念そうな顔をする。巨大な物を動かすというバルクホルンさんを思い出すが、裕子ちゃんも彼女のように「怪力」の使い手なんだろうか。

——そういえば、バルクホルンさんは元気だろうか。やっぱり軍の学校に入っているのだろうか。

「同期と仲が良いというのは素晴らしい事だぞ。宮藤芳佳ちゃん」

「!？」

「ひゃっ」

突然背後にしわがれた声が聞こえた。

驚いて咄嗟に振り向く。

そのせいで裕子ちゃんが振り落とされそうになったので慌てて手を掴む。

そこにいたのは、背の高い男性だった。丸っこくて一見優しそうな顔をしているが、目は鋭く光って常にこちらの動きを観察している。その行動は、私にこの男性がただならぬ所に長期間関わっていた事を感じさせた。

「宮藤ちゃん、孫と仲良くしてくれて有難う」

「孫？」

あれ、そういえばこの人、何処かで見したことあるような？

私は考えたが、裕子ちゃんがすぐに答えを言ってくれた。

「あ、お爺様！」

裕子ちゃんが駆け寄る。

そうだ、前に教室で北郷先生と話していた人だ。

「初めまして、かな？君の事は北郷からよく聞いている。いつも裕子と仲良くしてくれて有難う。私は宮崎雄三。裕子の祖父だ」

「こちらこそ初めまして。宮藤芳佳です。いつも裕子さんと仲良くさせていただいております」

雄三は裕子ちゃんに抱きつかれたまま手を差し出してきた。

笑いをこらえながらこちらも手を出して握手をすると、雄三の目が初めて笑った。

「宮藤ちゃんは礼儀が良いなあ」

「ありがとうございます、宮崎さん」

確かこの人は海軍の所謂お偉いさんだったはずだ。だとするとこの人を味方に着けておくに越したことはない。

「ところで、今日はどうしてこちらに？」

「固有魔法検査の様子を見に来たのだ。君の固有魔法も見学させてもらった。気付いたかね？」

成程、あの視線はこの人だったか。

「ああ、最後から三番目の検査の時の……」

「如何にも。私の視線に気付ける者などそういない。誇って良いぞ！」

そう言つて雄三はガツハツハと笑う。何とも豪快な笑いかたをする人だ。

「……芳佳ちゃんとお爺様、仲が良すぎです」

「ん？ おお、すまん裕子」

気付くと雄三に抱きつく裕子ちゃんが頬を膨らませていた。どうやら拗ねてしまったらしい。

……正直に言うとうれしく可愛い。

でも裕子ちゃんは早く雄三と遊びたいのだろうから私は退散するでしょう。

「ごめんね裕子ちゃん。私、走ってくるからお爺さんと遊んでなよ」

そう言つて裕子ちゃんを見る。幸いその一言で機嫌を直してくれたようだ。ニツコリと笑つて、

「うん！ 私、お爺様と遊ぶ！」

と言った。

「よし裕子お、たっぷり遊ぶぞー！」

走り始めた私の背後から張り切った雄三の声が聞こえた。

雄三が芳佳と会話した翌日の舞鶴鎮守府庁舎の一室。

窓を背にして一人の男が書類を読んでいた。

「宮藤芳佳、七歳。固有魔法の治癒に空前絶後の才能を持つ、か」
ページをめくる。

「宮崎裕子、七歳。固有魔法は……ほう」

少し驚いたような声を上げる。

「成程。貴方が『この二人ならば全く新しい戦術が使える』なんておっしゃられた時には訳がわからなかったものですが……」

書類を閉じる。

「この案は、実現すればなかなか素晴らしい物ではないですか」

「有難う御座います、司令長官」

正面に立っていた宮崎雄三が頭を下げる。

「しかし、本当にこのような戦術が実現可能なのですか？」

司令長官は問う。この戦術の有効性や効率の良さを頭の中では理解しているのだが、それでも疑問を持ってしまうのだ。

「私がこの目で確かめました。訓練をさせれば成功は間違いないかと」

「だから戦争の起きていない今のうちに一、二年訓練させる、という訳ですか」

「ええ。その通りです」

宮崎は自信満々に返答する。

「ふむ……」

宮崎雄三とこの司令長官は、前の大戦からの付き合いである。あの戦争で、宮崎の優秀さを最も間近に見ていたのも彼である。故に彼は、あの宮崎がここまで主張するならば、と考えてしまったのだ。

（それに、17年もネウロイは出現してないんだ。すぐに戦が始まることは無いだろう。……あ、そういえば）

書類に判を押しかけたところで、彼は一つの事を思い出した。

「宮崎さん、少しこの訓練計画の項目を追加しても良いですか？」

彼は一昨日の夜に技研の連中が持ってきた報告書を机に出した。

「私は軍人ですよ。司令長官に逆らえる立場ではありません」

「いやいや、この計画を立てたのは宮崎さんなんですし、ご意見を聞くのが筋というものです」

雄三は懐かしむように少し笑って、答えた。

「……わかりました。それで、どんな訓練を行うんです？」

「それはですね——」

そして、二ヶ月後。

北郷は、海軍附属舞鶴小学校は一年生の教室の教壇に立っていた。相変わらず二人しかいない教室を見渡す。

年相応に元気な宮崎裕子は、教壇に立つことはあまり無い私に興味津々といった風である。

その歳で大人びすぎているきらいがある宮藤芳佳は、私の決して良いとは言えない表情を見て少し警戒している。

「宮藤、宮崎。君たちに知らせておかなければいけないことがある」

「…何ですか、北郷先生」

宮藤の警戒度合いが上がったのがわかる。宮崎も流石に何か感じたようで、緊張した顔になった。

よし、一息に伝えてしまおう。

「我が皇国海軍は、君たちの固有魔法を見込んで新しい戦術を開発した。なので、来週から君たちにはその訓練を受けてもらう」

「訓練、ですか？」

「そうだよ。で、ここからが重要なんだが、君たちは舞鶴とは別の場所で学問と訓練を受けてもらう」

「え!?! 舞鶴からはなれちゃうの!?!」

宮崎が驚いた声を上げる。まあこのくらいの年齢の正常な反応だろう。例のごとく宮藤は冷静に話を聞いているが。

「辛いかもしれないが、君たちはウィッチだ。これも人々を守るためなんだ、堪えてほしい」

「場所はどこですか？ 期間は？」

「これから言うよ、宮藤」

一度言葉を切る。

「――場所は、大陸領の堀笛（ほりぶえ）。期間は、二年間だ」

まだ七歳の子に二年も遠い北の地で暮らせなんて北郷も命じたくは無い。しかし、これは上の命令なのだ。

「二年も帰れないの？ そんなのやだあ！」

案の定宮崎が涙目になって見ているのを見て、北郷の心は痛んだ。

しかし、今となってはどうしようもないのだ。

こうしてまだ幼い二人、宮藤芳佳と宮崎裕子は砂塵とタイガに覆われた広大な大陸に渡ることとなった。

1936年8月8日。彼女たちを乗せて舞鶴港から出航した一隻の客船は、一路大陸を目指す。船が進むほど下がっていく気温は、あたかも二人の魔女の厳しい未来を示しているようだった。

第七話

「艦長、本当にやるのですか!?!」

砲術長・川谷中佐の声が艦橋に空しく響く。

彼は我が皇国海軍が誇る新鋭戦艦、金剛の砲術長を任されるほどに優秀な男だが、それでもこの作戦は腑に落ちないらしい。

実際の所、表だって反論しないだけで本音では作戦の中止を望んでいる者がほとんどなのだろう。

私の代わりに副長が答える。

「砲術長、ここでネウロイを撃破せねば欧州に更なる被害が生じる。ここで、我々がやらねばならないんだ」

「しかしー!」

「これは命令なのだよ、中佐。司令部からの命令だ。今さら一艦長に過ぎない私が覆す事は出来ない」

「艦長…!」

副長に反論しようとする砲術長を黙らせる。

彼が反論しようとする理由もわかる。が、副長の言う通りここで我々がやらなければ欧州が更なる戦火に覆われる。

我々しか、あの怪異共を殺せないのだから。

機器を背負い、ストライカーに足を通す。

「機体点検終了。全て異常なし。バッテリーオン。フラップ全開。魔法混合コントローल、フリー。エナジーシャを回して下さい」

「あいよ…つとー!」

整備兵がエナジーシャを回し、エンジンが始動する。動き始めたそれが私を空に連れていかんと大声を上げる。

「魔導エンジン接続を確認。スロットル開く。空気圧良し。高度計、燃料ともに良し。冷却機稼働、油温正常。ロック解除、拘束装置良し。

宮藤芳佳、発進準備完了、です」

「芳佳ちゃん、がんばってー!」

裕子ちゃんの声援に手を振る。元気だなあ、あの子。

「発進装置、準備完了。準備はよろしいか？」

「問題ありません」

「では、加速する。手すりに掴るように」

「了解」

私とストライカーが乗る「モノ」は見渡す限り真っ直ぐに伸びるレールの上を滑るように走る。一切繋ぎ目の音が出ないのは、何本ものレールを溶接で繋げて一本のレールにしたからだ！と技術士官が得意そうに語っていたのを思い出す。

そう。私は今、ストライカーを装着して列車に乗っている。

もちろんただの列車では無い。この見た目はただの無蓋貨車のように見える列車は、他の列車が絶対に持っていない特徴を持つ「兵器」なのだ。

『射出速度に達した。そちらは発進可能か？』

後ろの通信装置を搭載した車両から通信が入る。

「宮藤芳佳、飛行可能です」

『了解。これより発進、僚機を旋回待機し、合流後は第一航路を航行、堀笛基地に着陸せよ』

「了解」

『よし、これより飛行及び射出訓練を開始する。射出用意』

さあ、飛ぶぞ。

『発射十秒前。九、八、七……』

衝撃に備える。

『三、二、一、発射！』

「っ！」

パンツと火薬の音が鳴り、グーン！と体に強烈なGがかかる。魔法力で強化されたこの体でさえ痛みを覚えるのだ、おそらく生身ならひとたまりも無くバラバラになるだろう。

「はあっ！」

失神しそうになるのを堪え、限界ギリギリの回転数までエンジンを回す。そして、一際重い荷重を感じた直後。

ふっ。

体が唐突に軽くなる。まるでどこまでも飛んでいけそうな感覚すら感じる。

離陸は成功だ。

「…宮藤芳佳、離陸しました。上空待機に移行します」

『了解、僚機を待て』

(この痛みは何度やっても慣れないな)

と心で呟きながら了解、と返して眼下を見下ろす。そこには広大な森とそこに敷かれたひたすら一直線のレール、その上を煙を上げ疾走する一つの列車があった。

——九六式航空歩兵射出車。

それが私が乗っていた列車の名である。

本来この列車は、低練度のウィッチでも飛行場無しで飛べる、という構想の下で陸軍が開発を進めていたらしい。しかし、陸軍は大きな壁にぶつかった。陸軍はカタパルトの開発経験が無かったのだ。それでも二年ほど独自で開発を目指したらしいが、流石に0からの開発は金も時間もかかりすぎ、遂に頓挫。泣く泣く海軍に依頼して「共同開発」と相成った。しかし、列車に搭載が出来るほど小型化すると力も不足する。よってまだ幼くとても軽い海軍最年少の私達が呼ばれた。なので、この兵器はあくまで「海陸共同開発」。来週にも一人陸軍の子が来る事になっているから、ようやくその体を成す事になる——というのが昨日酔った技術士官が私たちに喋った内容に私が客観的事実を加えたものだ。正直、私はここに来た理由が「軽いから」だけでは無いような気がしてならない。だって——

『芳佳ちゃん！飛んだよー！』

通信が入る。

下を見ると、裕子ちゃんが来るのが見えた。

『宮藤、宮崎両機は第一航路を飛行、一三〇〇に基地に帰投せよ』

『りょーかい！』

『了解しました』

裕子ちゃんが近付いてくる。

これは私の勘だけでも、彼女は天才的な飛行センスを持っている。その証拠に今まで飛行訓練などしたことも無かったにも関わらず、たった一ヶ月で美しく飛んでいる。おまけに記憶力も良いので座学も優秀と来ているし、このまま行けばすぐに有効な戦力になるだろう。

「行くよ、裕子ちゃん」

「うんっ！」

そして私たちは、第一航路と名付けられた訓練コースを飛び始める。この航路は試験用線路から基地まで百キロほどの一番基本的な航路であり、私たちが初めて飛んだのもこの航路でもある。

「ねえねえ芳佳ちゃん。私、この航路、すっごくきれいで大好き！」

「うん、そうだね」

初めて飛んだときは怖さから泣いていたのに、もう回りを見渡せている。これも彼女の才能の発露だろう。

「前」でもこんなに早く空に馴染む子はそういなかった。

あれ、でも私の時もそんなものだったっけ？

……そっか。私が初めて飛んだ時は――

『どうした宮藤。進路がずれている』

「っ、はい。申し訳ありません、教官」

「芳佳ちゃん、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ」

進路を修正する。

考え事をしていたら進路がずれていたらしく、横から教官に言われなければ大きく進路から外れる所だった。

教官の仕事はナビゲートと飛行の教育や実験のデータ集め、更には普段の私たちに対する初等教育。勿論今の私のようにミスがあった時のフォロワーも仕事なのだから相当な激務だろうに、それを気にせず私たちに飛行を教えてくれる教官に私は尊敬の念を抱いていた。

聞けば元エースウィッチで、大戦の終結に伴って航空歩兵を引退。今のように飛行機で随伴して後進のウィッチの教育をずっとしているのだそうだ。

(……私もやりたかったなあ、そういうの)

第二次ネウロイ大戦終戦後、教官にならないかって誘いがいくつも来ていたことを思い出す。

結局それを全て蹴って医学の勉強をしたけど、それも二年で無駄になつたし。

(私はその先を、絶対に変える)

眼下に広がる大陸を見下ろす。

(二度と、ここに血を撒いちゃいけないんだ)

そう心に誓つたたちようどその時、遠くの方に一筋の線が見えてきた。

『宮藤、宮崎機、着陸体勢に入れ』

「了解です」

「了解しましたー!」

堀笛基地に着いたのだ。

「二人とも、本当に上達が早いな。特に今日の飛行。見ていたこちらのお偉方が陸軍の奴らに早く見せたいなんて喜んでたよ」

「有難う御座います」

「ありがとうございますっ!」

いつものように教官と飛行後の報告を兼ねた会話をする。これも彼女の仕事の一つで、任意の情報を数値化出来る固有魔法を使って私たちの飛行や実験のデータを纏め、アドバイスまでしてくれるのだ。ただそのアドバイスが厳しく、失敗すると七歳児相手に容赦のない言葉が飛んでくる。飛行経験の無い七歳児をすぐに飛べるようにしろ、という上の無茶な命令をこなすには仕方がないのかもしれないが、そのせいで裕子ちゃんはこの時間になるとすっかり怯えるようになってしまった。

ちなみに今日は褒めてもらったので、裕子ちゃんはすごく嬉しそうにしている。

「ところで宮藤。今日は少し集中力が切れていたようだが、大丈夫か?」

「すいません、考え—いいえ、景色に見とれてしまつて」

おつとあぶない。考え事と答えればこの教官だし、色々聞いてくるに違いない。

「ふむ。だがいつも飛んでいる所じゃないか」

「……今日は天気が良かったので。はい」

「……まあ良い。何か悩んでいたら言うんだぞ？」

ふう。引き下がってくれたことに安堵する。

「いやな？ 実は昨日、お前たち二人の飛行を見た上が第三航路の使用を提案してきたんだ。私としては問題無いと考えてるんだが、もし宮藤の体調が悪ければ延期した方が良いと思つてな」

うん？ 第三航路つて何だろう？

「？ だいさん航路？」

裕子ちゃんも知らないようで首を傾げている。第一、第二は飛んだ事があるが、第三は初耳だ。

「ああ、お前たちは知らないのか。第三航路はな……」

教官が地図を広げる。

そこには私たちが普段飛んでいる平坦な森上空の第一航路、たまに飛ぶ山地上空の第二航路の他に確かに一筋の線が引かれていた。

「あれ？ でもこの航路、場所が変ですよー？」

裕子ちゃんの言う通り、この航路は少し変だ。特に通る場所が。

「そうだ宮崎。この航路は少し特別なんだ。何せ荒漠地帯の訓練用なんだからな」

「成程。だから航路の大半が荒漠地帯なんですね」

地図によると、この航路は射出地点から南西へ向かい荒漠地帯との境になっている川が北西に向きを変え、地点で川を越え、そして付近の湖の砂州を通過。その後その湖に沿って東に方向転換、基地に戻っている。

「そうだ。前の戦い……ああ、まだ二人とも生まれてなかったか？ とにかくその戦いで怪異共が空を飛ぶようになって、空中戦の必要性が出

フエン』とおっしゃっていませんでしたか？」

「ひっ!?せ、先生、ど、どうしたんですかー!?こわいですよお？」

裕子ちゃんは教官の出す巨大な雰囲気完全に怯えている。でも、本当に教官はどうしたんだろうか。

「宮崎、質問に答えろ。はいか、いいえかで」

「は、はい!た、確か、そう言っていたような気がしま……す……」

あ、威圧感で気絶した。

「……ヴィルヘルム・スハーフエン」

うん。今の教官、暴走しかけてる。あまりの感情の乱れからか、衰えているはずの魔法力が一時的に坂本さん（全盛期）くらいに戻っている。

「おい宮藤。私は少し用が出来た。第三航路の件はまた後日。今日はもう放課だったな？」

「はい、そうです教官。座学は午前が終わっています」

「よし、今日は解散。明日も訓練があるから休め」

立ち上がり、出ていこうとする教官。

しかし、彼女は扉の前で立ち止まった。

「あの、教官。どうかされましたか？」

「——お前は、どうして自分達がここに集められたか知っているか？」

「あのカタパルトのためだけじゃ無かったって言うんですか？」

気になっていたのだ。なんでわざわざ大陸で実験をやる必要があるのか。こんな実験、やろうと思えば北海道でも出来る。

「宮藤、お前本当は七歳じゃ無いだろ？」

「よく言われますが歴とした七歳です、教官」

教官の言うことも間違っていないけど。

「……お互いの固有魔法をよく知っておけ。生き延びるカギになる」

「……どういことですか？」

「ああ、それともう一つ。『第三航路には行くな』。それだけは守れ。もし命令が出たら故障を装って川に着水しろ。じゃあ」

「教官、それって……行っちゃった」

うーん、何が何だかわからない。

『ヴィルヘルム・スハーフェン』という恐らく地名な単語が出た途端に教官が豹変した理由もわからないし、ここに呼ばれた理由とか『第三航路には行くな』だとか言われてもサツパリだ。

「裕子ちゃんは……寝てるし」

ああ言われると裕子ちゃんの固有魔法が気になってくる。考えてみると知り合ってから数カ月経っているのに固有魔法すら知らなかった。

「まあ、それは裕子ちゃんが起きてからで良いか。とりあえず『ヴィルヘルム・スハーフェン』を調べてみようかな？」

戦争を止めるためには知識も必要だし、ちようど良いか。

そう思った私は、裕子ちゃんを担いで図書室を兼ねた教室に向かった。

第八話

怪異。

それは古代より人類と敵対してきた謎の者たちだ。

我が祖国、扶桑も遙か昔からそれらと戦い続けてきた国の一つで、私が生まれてからも二度、対怪異戦争を行っている。

私も怪異から祖国を守りたいとの思いで海軍士官学校に入学し、十年前の第二次大陸戦争で初めて実戦を経験した。

当時の扶桑海軍には最新鋭の戦艦が四隻在籍していた。

ブリタニアの最新技術を用いて建造された敷島型戦艦だ。

彼女たちの姿は勇ましく、怪異など造作もなく殲滅出来ると当時は誰もが考えていた。

しかし、結果は辛勝だった。

陸の怪異の頑強さが予想を遙かに越えていたのだ。

自慢の巨砲があつても、大量の副砲があつても、射程外の陸上では支援のしようがない。

私たちは祖国を思う若い陸軍の兵士たちや魔女たちが死ぬのをただ聞いている事しか出来なかった。

——だから、少し嬉しかったのかもしれない。

「おい聞いたか、欧州で空飛ぶ怪異が出たらしい——」

「ああ、何でも海上を飛んでブリタニアも軽微だが被害を受けて——」

「扶桑海軍もどうやら——」

そんな噂が囁かれた時、私の心は確かに弾んでいた。

（『ネウロキ大戦二於ケル主戦線要攬』……これに載っていると良いんだけど）

気絶してからそのまま寝てしまった裕子ちゃんを部屋に入れてから十分後、私は図書室にいた。

「あつた！」

ヴイルヘルム・スハーフェン。

彼の本曰く、カールスラント有数の港湾都市らしい。

「――それで、教官が言ってたのはこの戦いかな？」

その戦いは1918年、終戦の直前に発生している。

「扶桑海軍所属のウィッチ六名、カールスラント陸軍所属のウィッチ四名が戦死……」

ヴイルヘルムスハーフェンにてネウロイが突如大量に出現。ほとんど人類が領土を奪還していたヨーロッパにおけるネウロイの最後の足掻きは、連合軍ウィッチ十名の犠牲により防がれた、らしい。扶桑のウィッチが死んだ記述はここにしか無いから、教官の戦友もここで戦死したんだろう。

しかし、この書籍は私に更なる謎を与えた。

「……何で教官がここに反応したんだろう」

ヴイルヘルムスハーフェンの項目、というかネウロイ大戦の戦績には金剛の「こ」の字も出てこないのだ。

「裕子ちゃんの勘違い……?」

いや、あの子は優秀だ。

特に物の記憶を得意とする彼女がそんな勘違いをするだろうか。

しかし、念のため調べてみても金剛型戦艦の三隻共欧州には派遣されてない。派遣された大型艦は旧式の戦艦薩摩や富士が精々で、後は駆逐艦や補給艦ばかり。

じゃあ、何で教官は――

「おい、芳佳」

足元からやたら老けた声が聞こえ、私は現実を引き戻された。

「何?兼定」

それは、使い魔の兼定だった。

久しぶりに話す気がするのは気のせいかな?

毎日話してるからその筈なんだけど。

「何、じゃない。お前の教官の様子がおかしいから偵察してきてやったんだ」

「へえ、今日は覗きじゃなくて偵察なんだ」

あの兼定が覗きとかアレな事以外をやるとは、と私は素で驚いた。
この色ボケ使い魔は自分の外見を利用して、いつも美人の部屋に上
がったり、あまつさえ入浴すらする事もあるのだ。

「ヤバい気配があったからな。俺も今日は真面目だ」

あ、自覚は一応あるんだ。

おっと、そんなことより。

「で、教官がどうしたの?」

「そうそう、そっちが本題だ。あの女、何か知らんが飛行機に乗せられ
てたぞ」

「へー。……………え?え!」

驚いて窓に駆け寄る。

そこには、目を閉じた教官と何者かが乗った飛行機が離陸していく
姿があった。

フオーン…………フオーン…………コオンツ…………

周囲に魔法力を数秒おきに放出する。

この時、うまく球状に出さないと反応が分かりにくくなるから気を
付ける。

(距離は二〇〇を維持つと…………夜に飛ぶのも久しぶりだなあ)

初めて夜間に飛んだときは本当に怖かったのを思い出す。

それこそエイラさんやサーニヤちゃんが一緒に飛んでくれなけれ
ば、この美しい夜空も一生知らなかっただろう。

——サーニヤちゃん。

ネウロイとの戦争が終わった時、彼女は国に帰ったらご両親と会う
んだと言っていた。

別れた時は、あんな戦争が起こるなんて思ってもみななかったから、
「またね」って言っていたのを思い出す。

そして、それがサーニヤちゃんと直接会った最後の記憶だ。

ご両親に会えた事は手紙で知っているけれど、直後に戦争が起きて結局会えずに私の人生は終わってしまった。

二十歳になったら、ウィッチをやめて父と音楽を演奏する。

それが最後の手紙の内容だったが、その後の彼女の事を知ることすら遂ぞ無かった。

(でも、サーニヤちゃんは私のこと、知ってたんだろうな)

扶桑の軍部が私の「戦い」を「英雄」として喧伝されていた様に、オラーシヤの軍部は私を「殺人者」として大きく報道していたはずだ。

(もしサーニヤちゃんと会ったら、ちゃんと謝ろう)

私はサーニヤちゃんの同胞を、たくさん殺した。

謝るだけじゃ済まないだろう。

だから、私はサーニヤちゃんに対する償いもしよう。

もちろん「前」の事を「今」のサーニヤちゃんは知らないだろうけど、それで良いんだ。

(あと、お礼もね)

私が今こうして教官を追えているのもサーニヤちゃんが教えてくれた技のお蔭だしね。

……それにしても、あの飛行機は教官を載せてどこに行くんだろう。

もう基地を出てかれこれ二時間は飛んでいる。

下を見ると二つの湖を仕切るような砂州が続いていて、その先は……

「あれ、これって第三航路……?」

慌てて地図を思い出す。

そういえば、さつき川の上を飛んでいた気がする。

でも何で訓練用航路なんかを飛ぶんだろう。

『芳佳。前の飛行機、少し様子がおかしい』

『え、本当?……本当だ。ありがとう兼定』

兼定と頭で会話する。

確かに言われてみれば、こんな何も無いところで前の飛行機が降下を始めているのがわかる。

下を見ると砂州がもうすぐ終わる所で、既に荒漠地帯だ。
と、その時だった。

「え!？」

『!?!』

教官が、複座の飛行機から突き落とされた。

第九話

「教官ー！」

エンジンがオーバーヒート寸前になるまででありつただけの魔法力を注ぎ込む。

『芳佳、あの飛行機が逃げる「静かにしてっ!!」』

兼定が何か言っているが今教官を助けなければ教官は死ぬんだ。

構ってる暇は無い。

「間に合ええ……っ!!」

ストライカーがミシミシと音を立て始める。

「耐えてっ、お願いー！」

ストライカーに祈る。

地上まで二百米。

教官の顔が見えた。

地上まで百五十米。

教官が何か口を動かしているのが見えた。

地上まで百米。

あと少しで手が届く……!

地上まで五十米。

あと少し!

「く……な、み……く……く……」

地上まで廿米。

届く!

「宮藤、来るなああああああああー！」

「——へ!?!」

地上まで五米。

あと少しで墜落と言う所で教官を掴まえた私は、シールドを展開。荒漠地帯の荒れ地に不時着した。

「——はあ。それで、整備兵のいない間を見てここまで来た、と」

「はい。でも教官がご無事で良かったです」

教官は、私をひとしきり問い詰めた後、また大きなため息を吐いた。

「……ダメ元で聞くが、ストライカーは？」

「……見ての通りです。ごめんなさい」

そう言っただけで私は横にずれた。

そこにはボロボロになった九五式艦上戦闘機があった。

「これじゃあ帰れない、か」

「……ごめんなさい」

私が謝ると、教官は手をヒラヒラさせて少し笑った。

「いや、七歳の行動力を甘く見てた私が悪かったんだ。お前のせいじゃない」

「……」

そう言った後、教官は顔を曇らせた。

「なあ、宮藤。ここ、何処だかわかるか？」

「確か、第三航路の途中です」

「……そうじゃない事を祈ってたけど、やっぱりなあ。ヤツらが出たってトコ、ここしか無いからなあ」

そう教官が言っただけで、立ち上がった瞬間だった。

「——」

辺りが赤く光った。

呼吸が詰まるような衝撃と共に、背後の岩が砕け散る。

（——ネウロイツ!?!）

「チツ。もう少し待ってってくれると思ったんだけど」

そう言うのと教官は私の前に立った。

「教官、あれはネウロイの光線じゃ……」

「宮藤。私の後ろに隠れろ」

教官は、私の問い掛けには答えずにそれだけ言って魔法力を発現させる。

「ちよつと待つてください。一体何がどうなってるんですか! どうしてネウロイがいるんですか!」

「ああ、お前は奴に遭った事があるんだったか。……隠しても無駄か」

地震のような足音が荒野を揺らす。

「ここは、あのネウロイとかいう怪異共の、拠点でな。そして今、あいつらが目覚めた」

「ネウロイの……拠点?」

え、つまりここは、巢?

「そうだ。見つかったのは数カ月前でな。ヒスパニアで戦役が起きて、それで荒漠地帯も含め徹底調査したら見つかったんだ。でも、事前に発見できたのは良かったが攻勢に踏み込むには軍備が足りなくてな。幸い奴らも休眠しているみたいだからって様子見していたんだが……」

教官は空を睨む。

「偶然……にしては出来すぎなタイミングだな」

そう言っている間にも、足音は近付いてくる。

教官の魔法力の気配が増大する。

「……宮藤、私のそばを動くなよ」

「……はい」

まずい。

今は夜だから周りが見えないが、それでもあいつらが大量にいるのが気配でわかる。

「何だ、奴らが怖いのか? 心配するな、必ず帰れる。何てったってエースの私がいるのだからな!」

そう教官は笑っているが、それは強がりだということも私でも理解できた。

そもそも、今の教官の言動は矛盾している。

死地から脱したいのなら逃げれば良いし、普段の教官なら私に「動くな」など言わない。

こんな場合はすぐに逃げろと言うはずだ。

——じゃあ、何で逃げろと言わないのか。

答えは簡単だった。

『逃げない』のではない。

『逃げられない』。

「……」

周囲を探るとすぐにそれがわかった。

ここは、小規模なネウロイの巣のその中心で。

中心とすることは巣の外縁から最も離れていて。

当然その中にはネウロイが大量に蠢いていて。

——その全てが、こちらを見ていた。

「——っ！教官、ごめんなさいー！」

「何だ宮ふっ!？」

教官をウィッチの力で転ばせ、自分も地面に伏せてありつただけの厚いシールドを展開する。

次の瞬間、今まで教官の頭があった所を幾百もの光線が通り過ぎ、いくつかが反応して爆発を起こした。

凄まじいエネルギーに少し驚くが、落ち着いて対処する。

こんなもの、ベルリン解放時に比べればどうってことないのだ。

そうしてシールドを張って一分ほど。

ようやく辺りが静かになったので、シールドを閉じて私たちは岩影に逃げ込んだ。

そこで改めて分厚いシールドを張る。

これでネウロイが来ても大丈夫だろう。

「教官、お怪我はありませんか」

「……ありがとう、宮藤」

その言葉を言う教官の顔は、油断に対する悔いと恥ずかしさで酷く歪んでいたが、それでも無理に笑みを浮かべていた。

だから私は、こう言うのだ。

「教官はもうシールドも怪しいんですから、無理しないでください。もし教官が死にでもしたら、私や裕子ちゃんが悲しみます。大人しく私のシールドに守られてください。大丈夫、私のシールドは破れませんから」

……うん、ちよつと言い過ぎたかな？

少し不安になったので教官を見る。

すると、それを聞いた教官は、ぽかん、とした後大笑いを始めた。「あーはっはっはっ！宮藤も言うようになったなあ！そうかそうか、『大人しく私に守られてください』か！七歳が良く言うなあ！あっはっはっ！」

と、教官はそこで笑いを止め、真面目な顔になる。

「……私の厄介事に巻き込んで、本当にすまない。それと、シールドはよろしく頼む」

教官が悪い訳では無いのに、彼女は謝る。

あの教官の事だ、本当に悪いと思っっているのだろう。

「いえ、私が好きで付いてきたんです。教官のせいじゃありません。……それに、今はここを脱出する方が先です」

「ふふ、それもそうか。……しかし、どうする？ここは囲まれているぞ」

教官の言う通り、ここはネウロイに完全に包囲されている。

いくら魔法力で周りを見てもネウロイの間に隙間は無い。

「……ちなみに教官、武器は何かありますか？」

「すまない。突然連れられたと思ったら落とされたからな、今は何も無い」

武器も無し、と。

——アレをやるしか無いか。

「教官、私に一つ案があります」

私は教官に策を説明した。

「……武器も無しに奴らの中に突入だと？そんな案、私が承認するとも思っただのか？」

やっぱり反対されるか。

でも私はそれで欧州戦線の激戦から生還してきたし、それ以外に手が無いのだ。

「前」の事を言う訳にはいかないが、説得するしかないだろう。

「——やむを得まい。わかった、その案で行こう。……死ぬなよ？これは命令だからな」

「了解です、教官。私は死にませんよ」

数分後、ようやく教官は案を了承してくれた。

大丈夫、私はあの戦いを生き延びたのだ。

今回もやれる。

『——で、何をするんだ？俺は何をすれば良い』

「兼定、貴方にも魔法力を注ぎます。そして、私と一時的に同化してください」

かつて欧州で巡りあった若本さんに教えてもらったがある。

彼女曰く、彼女の固有魔法である『覚醒』は、実のところ固有魔法では無い。

繊細な魔法力のコントロールと、巨大な魔法力の受け皿となる使い魔さえ居れば誰にでも使える、らしい。

そして私には「前」での戦いで培った魔法力の操作技術と、兼定という何百年とネウロイを封じて来た霊刀の化身の使い魔の存在がある。

『待て芳佳。それでお前は大丈夫なのか!?俺が暴走して人格が——』

「大丈夫、兼定。私を信じてください」

『しかし、今のお前は危う——』

「私の事はどうでも良いんです。私は教官を守らないといけないので」

『だから、っ、おい、人の話を——』

うるさいので勝手に魔法力を流し込む。

すると、尻尾と耳が白く光り始めた。

体も軽くなり、周りも見渡せるようになる。

そらにしても、兼定はどうして私にあそこまで構うのだろうか。

私なんてどうなっても良いのに。

「では、宮藤芳佳。出撃します」
敬礼をする。

教官は、無言で答礼をした。
岩場から首を出して、周囲を魔法で確認する。

相変わらずネウロイに隙間は無いが、先ほどの爆発で私たちを倒したつもりでいるのかこちらに注意は払っていない。

「教官、私が合図します。そしたら飛び出て走ってください」
「わかった」

教官と打ち合わせをし、岩場から出る。

（まずは……あいつからにしよう）

兼定の本体である小刀を抜きつつ、無音でネウロイの背後に立つ。

（まずバランスを崩して——）

右脚部の付け根を叩き斬る。

奴らが転べばこっちのものだ。

（次にとどめ）

魔法力を集中させたその拳をネウロイに叩き込む。黒い巨体が、閃光に包まれ消える。この間二十秒。

そして、敵が気付かない間にその隣のネウロイも倒す。

（やっぱり、「前」と比べると、弱い）

それでも数は多いのだ。効率的に奴等を倒さないといけない。

——私はこの瞬間、ネウロイをただ倒すための機械になっていた。

（次。）

撃破。

背後から光線を受けるが、シールドで弾く。

（次。）

撃破。

光線も全て弾く。

（次。）

撃破。

シールドを常時展開し始めた。

（次。）

撃破。

感覚が戻ってくる。撃破の時間が十秒ほどになる。

(次)

撃破。

こんなやつらに負けるはずがない。

(次——！)

「はあ、はあ、はあ……！」

気付けば私は、百体以上のネウロイを倒していた。

念のため周囲を見たが、最早私たちを止めれる数のネウロイはいなかった。

もちろん全て倒した訳では無いが、私が丸腰の教官を護りながら脱出は出来そうだ。

岩場に駆け寄る。

「教官、行きましょう！」

「わかった、宮藤。……私の事を二度も救ってくれて、ありがとう。本当に感謝する」

「……ありがとうございます」

感謝されると、困る。

私に感謝される資格なんて無いのに。

教官の手を引いて走り出す。

そして、時おり来るネウロイを倒しつつ一軒ほど進んだ時だった。

「ところで宮藤。一つ疑問なのだが」

走りながら教官が尋ねてきた。

ネウロイの様子を見つつ、教官の方を振り返る。

「何でしょう、教官」

「——お前の足元の、その魔方陣は何だ？」

「……？」

足元を見る。

「ん？」

確かに私の下に魔方陣が出来ている。
すると、次の瞬間。

——キンツ

「!?」

頭に猛烈な痛みを感じ、倒れこむ。

「宮藤……どうしたーみ……ふ……ふ……」

音も聞こえなくなってきた。

「み……ふ……お……お……」

なんで？

まだ　す　からでれてない。

まだねうろいがあるのに。

わたしがいないときようかんは。

「ぎよ……か……に……げ……」

そうして、一瞬見覚えのある天井を見た気がした直後、私の意識は途切れた。

時は少し遡る。

「……んゆう……スピー……よしかちや……」

扶桑皇国海軍堀笛基地。

その宿舎の一室にて一人の少女（幼女）が唯一の同期とは対照的な
平和な寝息をたてていた。

「……ま……あ……あ……お……お……」

宮崎裕子という名のこの少女は、前連合艦隊司令長官の孫娘にして、
今海軍内で大注目の天才コンピの片割れである。

片や近代的不ライカーの祖である宮藤一朗博士の愛娘であり、七
歳にしてネウロイ撃破に成功し、魔法力も観測史上最大、その歳で抜
群の飛行センスを持つ天才、宮藤芳佳。

片や海軍の大物を祖父に持ち、珍しい固有魔法を発現させ、学門の

成績も優秀、宮藤芳佳に匹敵する飛行センスで彼女に追隨する天才、宮崎裕子。

宮藤の後ろに常にくっついて共に行動する姿は、年齢から来る愛嬌も相まって古巣の舞鶴やここ堀笛基地においても名物となっている。

しかし今やその二人は離ればなれになり、片割れは生命の危機を迎えている。

「ムニャ……まっつてよお……いかなければ……行かないで……はっ！芳佳ちゃん!？」

悪い夢でも見たのだろうか。

掛け布団をはね除け、彼女はベッドから飛び降りる。

しかしいくら探しても同室に唯一の同期であり唯一の親友はいない。

「芳佳ちゃん……どこ……どこ……どこ……どこ……？芳佳ちゃん……？芳佳ちゃん……？？」

その円らかな瞳に涙を貯めながら部屋中を探すも、見つからない。

「芳佳ちゃん、芳佳ちゃん、芳佳ちゃん、芳佳ちゃん……」

姿の見えない親友の名前をぶつぶつと言いながら彼女は部屋を出る。

すると、ドタドタと廊下を走る音と、その主である基地の男性兵士たちの声が聞こえてきた。

「おい、宮藤さんがいないぞー！」

『先生』もどっか行っちゃまったって本当か!？」

それを聞いた彼女は、愕然とする。

「――芳佳ちゃんがどこかに……？」

また親しい人が自分から離れていってしまう。

彼女は恐怖した。

リリリリン！ジリリリリン！ジリリリリン！

「ひっ！」

その電話は、彼女の心が一番不安定な時を狙ったようにかかってきた。

ジリリリリン！ジリリリリン！ジリリリリン！

なんとか恐怖心を押し留めて、電話機に近付く。

「もしもし……う？」

しかし、おそるおそる受話器を取った彼女の顔が、それ以上歪むことは無かった。

「お祖父様！」

『久しぶりだな。元気にしてるか？』

そう。

電話の相手は、彼女が最も信頼出来る人物である祖父、雄三だった。彼女の心に限りない安堵が広がる。

誕生以来初めてかつ唯一の親友である芳佳がいなくなり、半ば恐慌状態の裕子にとって、このタイミングでの雄三からの電話は正に天からもたらされた一本の蜘蛛の糸だったのだ。

だから、彼女は即座に彼女の親友を救うべく、祖父に縋った。

「あのっ、お祖父様！一つお願いがあるのっ！」

『ほう、そっちからお願いとは何と珍しい。いいぞ、何でも言いなさい。欲しいものかね？扶桑に帰りたいのかね？……それとも、芳佳君のことかい？』

「……！！芳佳ちゃんのことっ！」

彼女は思った。

やっぱりお祖父様は凄い。

私のことは何でもわかるのだ。

何故芳佳の事だとわかったのか。

普通の人なら持つそのような疑問を、裕子は抱かなかった。

何故なら、雄三の庇護の下で育ってきた裕子は基本的に彼を疑うという事をしない。いや、出来ないように育てられた。

そして、彼女はこうも思っていた。

きっとお祖父様ならなんとかしてくれる、と。

しかし、彼女に返ってきた答えは意外な物だった。

『裕子や、よく聞きなさい。今、芳佳君はとっても危ない所にいる。ネウロイに襲われているんだ。私も、助けるのは難しいだろう』

「!？」

裕子の顔面が蒼白になる。

私の大事な大事な親友はあのお祖父様ですら危ない所に行ってしまったのか。

雄三は言葉を続ける。

『でもな、裕子。芳佳君を助ける方法が一つある』

「本当っ!？」

雄三の言葉に顔を上げる裕子。

しかし、どうやって?という疑問は裕子の中には浮かばなかった。

雄三が出来ると言えば出来るのである。

『それはな、裕子』

「……(ざくり)」

受話器と裕子の間に緊迫した空気が流れる。

『お前の固有魔法を使うのだ』

「私の、固有魔法……?」

『そうだ、裕子。お前の固有魔法を思い出すんだ。お前の固有魔法は

……』

「そっか!芳佳ちゃんを『てんい』させれば良いんだ!」

裕子は顔を輝かせる。

が、すぐに俯いた。

「でも、私、『てんい』のセーぎよを間違えてばかりだよ……?」

ここに来る前の固有魔法テストでも彼女は制御を間違えて、間違えた場所に目標を動かしてしまった。

『大丈夫、裕子なら出来るさ。だって、裕子は芳佳君が大好きなんだろう?あの娘の姿を強く思うんだ。そして願うんだ。会いたい、会いたいってね』

彼女は思い出す。

初めて家の外を出て入学した学校。

最初は自分しかいなくて怖かったのに、芳佳ちゃんというかけがえない親友が出来てからはとても楽しくなった。

本で読んだ「友達」というのはこんなものだったのか、と感心もした。

初めて空を飛んだ日。

怖かったけど、芳佳ちゃんがいたから頑張れた。

今は空は大好きだけど、その中でも芳佳ちゃんと飛ぶ空が一番好きだ。

私の家の外の思い出は、ほとんど芳佳ちゃんに埋まっていた。

また会いたい。

「……ありがとう、お祖父様！裕子、やってみる！芳佳ちゃんを助けてあげる！」

『頑張れ、裕子』

「うんっ！またね！」

そう言って受話器を置いた彼女は、芳佳の事を再び考え、魔法力を発現させる。

「芳佳ちゃん。今、助けるからね！」

そして、固有魔法を発動。

青い魔方陣が部屋に浮かび上がる。

（芳佳ちゃん、芳佳ちゃん、芳佳ちゃん、芳佳ちゃん——）

そして、彼女の思考が芳佳一色になった時だった。

パアアアアツ！

青い魔方陣が一際強く輝き、その中に人影が現れた。

それは、彼女がよく見知った人影だった。

ふらっ、と中の人影が倒れる。

「芳佳ちゃんっ！」

魔法を止めて芳佳に駆け寄る裕子。

そして彼女は、倒れ伏した芳佳を優しく抱いた。

「——おかえりっ」

「頑張れ、裕子」

『うんっ！またね！』

その孫娘の声を最後に電話は切れた。

そして受話器を置いた宮崎雄三海軍中将は、一人暗い笑みを浮かべた。

「ようやくあの邪魔者が消えたか」

第十話

『「彼ら」は人類にとって完全なる敵ではない』

俺の叔母がよく言っていた言葉だ。

彼女は、経歴だけ見ればハイデルベルク大学を首席卒業した若き秀才であり、特に専攻の怪異に関する分野では五指に入るといふまさに「天才」である。

だが、実際には学会からは見放され、世間でも常時白い目で見られ変人扱いされる孤独な研究者だった。

何故優秀な彼女を学会は干していたのか。その理由には、冒頭の言葉が関係していた。

そう、彼女の言う「彼ら」とは怪異の事だったのだから。

彼女はその持論を絶対に譲らなかつた。何度馬鹿にされようと、ハノーファーの自宅で資料に埋もれながら日夜研究に邁進していた。彼女は、本気で人類と怪異の和解を目指していたのだ。そしてその姿勢は、この戦争が開戦した時でさえ変わることは無かつた。しかし。

最終的に、「怪異とネウロイは別」と言つて続けられた彼女の研究は、1916年を以て幕を閉じることとなる。

それは、二年前のこと。

徴兵され、ヴィルヘルム・スハーフェンの港湾を歩哨する毎日を送っていた俺のもとに、母からの電報が届いたのだ。

『妹が失踪した。家ほもぬけの殻になつてゐる』

#####

私は、暗闇を走つていた。

何も見えないその闇に、誰かがいる気がして。

ただただ闇雲に走つた。

(あれは……！)

遙か先に、白い服が見えた。私はスピードを上げる。

そうだ、あの背中は。

「教官！」

声をあげ、私はその背を追おうとする。ここで追い付かなければならない。そんな気がした。

「教官……………!?!」

が、それが出来ない。何かに足を掴まれ、進めない。

「放して！お願い、放してっ！」

足は進まない。私はせめてと必死に手を伸ばす。

「教官……………」

そして、教官が闇に吞まれ、私の手すらも何かに掴まれて――

「……………はっ!?!」

目が覚めた。

「ここは……………」

視界が明るい。もう朝なのか。

そう思ったところで初めて、私は手が誰かに掴まれていることに気が付いた。

（誰!?!）

即座にその「誰か」を確認すべきと判断、私は横を向いた。

「おはよー！芳佳ちゃん！痛いところない!?!」

手を掴んでいたのは、同室の裕子ちゃんだった。

「…………おはよう、裕子ちゃん」

一瞬で力が抜ける。

状況から見て、おそらくいつもの時間になっても起きない私を起こそうとしてくれたのだろう。

この分だともうすぐ朝食の時間だろうから、朝の鍛練は出来そうにない。

（何してるんだ私！寝てる場合なんかじゃない！）

己を叱りつける。こんな時間まで寝てしまうなんて弛みすぎだ、と

気を引き締める。

そして、ベッドから降りようとして――

「あれ……？」

猛烈な違和感に襲われた。

(……何？どこがおかしいところが……？)

いつもどおりの部屋。

いつもどおりの外の森。

いつもどおりの学習机。

部屋の中に違和感を感じる要素は無い。

――違う。もっと根本的な所が違う。

私のそぶりが気になったのか、彼女が振り返る。

「？どうしたのー？……あつ、もしかしてケガあった!?!いむ室いこうか!?!」

怪我？

私は、怪我するようなことをしたの？

そういえば、さつきも痛いところがどうか言われた気がする。

(私は、何かを忘れている……？)

しかし、そう思った次の瞬間。裕子ちゃんの次の言葉で、私は全てを思いだす。

「だって芳佳ちゃん、昨日ネウロイと戦ったんでしょ!?!」

私は、ハツとした。

そうだ。

昨日、私は何者かに連れ去られる教官を追いかけて、そして――

昨日の感覚が徐々に甦ってくる。あんなにネウロイと戦ったのは何年ぶりだろうか。

と、ここで私は矛盾に気付いた。

「あれ、じゃあどうしてここに……？」

そう、朝から感じていた違和感はそれだったのだ。

戦場で、謎の魔方陣を見たことは覚えている。しかしそれ以降の記憶がない。

「それはね、私がまほうを使ったからなんだ！」

「まほう……魔法？」

「どういう意味だろうか？」

「そー…私のこゆーまほー。『てんい』って行って、ものを遠くまではこべるんだ！」

なるほど、『転移』という固有魔で私をここに転移させた、と。

「そっか。ありがとう裕子ちゃん」

「えへへ……」

とりあえず、お礼を言っておく。彼女が私を助けたのは事実だからだ。

でも、肝心な事がまだ聞けてない。

私は、一回深呼吸をした。そして、尋ねる。

「ねえ裕子ちゃん。教官も私といたんだけど、知ってた？」

裕子ちゃんは、はてなマークを顔に浮かべた。

「ふあゝあ……。暇だなあ……」

若い通信手の呟きは、誰にも聞かれず宙に消える。

配属時こそ、開発の最前線に携われると喜び勇んで来たものの、待っていたのは良く言えば平和な、悪く言えば退屈な日々。なにせ基地直属の通信施設、それも試験が主任務の基地のそのの仕事など定時報告か試験の結果報告くらいしか無い。特に今日のように試験すらも無い日はひたすら機械の前で座るだけである。

「ラヂオでも聞くか……」

そんな環境なので、先達たちは伝統的にラヂオの傍受という方法で暇を潰していた。基地も通信手たちが暇なのは知っているので、それを見て見ぬふりをしている。せっかく高性能な通信設備があるのだから聞かなくちゃ損、とは前任の言で、その通信手もそれに習い、ラ

ヂ才を聞かんと目の前の機器に手を伸ばした――

『堀笛基地、こちら舞鶴鎮守府。応答を乞う。堀笛基地、こちら舞鶴鎮守府。応答を乞う』

「うお!?」

突然の着信に不意を突かれたのか、彼はすつとんきような声をあげてしまう。が、すぐに我に返ってマイクの前に立ち、応答する。

「こちら堀笛基地。どうされました?」

『……………』

こちらが応えたのに、返答が無い。

「舞鶴鎮守府、どうされました?こちら堀笛基地」

何かあったのか。彼が訝しんでいると、しばらく無音が続いた後に先程とは違う声が返答してきた。

『やあ、返答遅れてすまない』

「何かあったのですか?」

新しい声は太く、何か貫禄を感じさせる物だった。

『いや、ちよつとした用があつてね。ところで君、そこに誰がいるかい』

その言葉に通信手は困惑する。

軍の回線の私的利用は完全なる軍規違反だし、それに先程からどうも相手の応答は同業のそれではない。

「…………失礼ですが、名前と階級を伺っても?」

『ああ、こりや失敬。名乗っていないかつたか』

「はあ」

相手はどうにも歳をとると常識を忘れて困る、と呟き、こう言った。

『海軍中将の、宮崎雄三だ』

「は…………?」

かいぐんちゆうじょう。海軍ちゆうじょう…………海軍中将!?

彼は即座に姿勢を正した。

「しつ、失礼しました!中將とは知らずに…………!」

『気にしなくて良い。ところで、さっきの質問だが』

「はっ、自分以外に誰もおりません！」

彼はすでに、雄三の質問に答えるだけの機械と化していた。

『わかった。もうすぐそこに、宮藤訓練生が来る。そしたら席を外してくれ。誰も、そこに入れるなよ』

「了解しました！」

だから、彼は命令に疑問を感じなかった。

——バンツッ！

その時、巨大な音を立てて扉が開いた。

「だっ、誰だ!？」

『……………』

入ってきたのは、堀笛基地の名物訓練生、宮藤芳佳。中将の言葉通りだった。

『通信手、席を外してくれ』

「はっ！」

彼は回れ右をすると即座に廊下に出て防音扉を閉めた。

結局、彼が事の奇妙さに気付いたのは次に扉が開いた時だった。

第十一話

空虚。

それが、あの叔母の家の現状を言い表すのに最適な言葉だった。家主の失踪の報を受け、非番の日に足を運んだその家は、すっかり生気を無くしていたのだ。

とはいえ、家具が何もないとか、そういったわけではない。少ないながらも一般的な家庭が有する程度の物は揃っている。

しかし、この家を昔から知っている俺からすれば、がらんどろと言って差し支えなかった。

例えば、部屋の片隅の机。

かつては怪異の論文や資料で溢れ、机だということすら忘れられていたそれは、しかし今やその武骨な姿をあらわにしている。異国の研究書ばかりだった本棚や、古の魔具で埋まっていた一室も、全てもぬけの殻。ここで怪異の研究がされていたと言われても信じられないほどに、それ関連の物だけがすっぽりと消えていたのだ。

(まさか、逮捕されたのか?)

この時世に公然と『怪異が敵とは限らない』などと言っていれば連行されても不思議ではない。むしろ今まで無事だったのが不思議なくらいだ。しかし、もしそうだとしたら……

「俺も、監視されるんだらうなあ」

これからが憂鬱になってくる。やっと人類が巻き返してきたのに。ようやく勝てそうなのに。

俺はその辺にあった椅子に腰掛け、頭を抱えた。
その時だった。

ブウウウウウウン……………

蛾の羽音のような、奇妙な音が聞こえ始めた。

#####

私の問いに、裕子ちゃんはきよんとしてしまった。

「ねえ、教官は？私と一緒にいた教官は？」

悪寒が走る。

そんなはずないと、現実を見たがらない私が言う。
だって、私と教官は一緒にいたのだ。

ネウロイに取り囲まれた私たちは、ようやく脱出出来るところだったのだ。

なのに、私だけ転移したのだとしたら、教官は、もう……
しかし、無情にも、彼女はうーんと唸った。

「でも、私が転移させたのは芳佳ちゃんだけだよ……どうしたの芳佳ちゃん!？」

ああ、なんてこと。私の目の前が暗くなる。

裕子ちゃんが何か呼び掛けているが、何も耳に入らない。
かつて何度かあったとは言え、誰かが死ぬのは嫌なことだ。

あの、厳しくも優しくかった教官。

どこか坂本さんを彷彿とさせる教官。

彼女には、もう会えないのだ。

……………そして、何よりも。

私は、マモレナカッタ。

守れなかった。

何年も戦い続け、人を何人も殺して、また守れなかった。

教官さえ救えないで、戦争を止められるのか？私は、このまま生きてまた同じ未来に進むのか？

また、誰かと、争うのか？

また、人を、殺すのか？

そんなの、嫌だ。

嫌だ。嫌だ。嫌だ。

殺したくない。殺したくない。殺したくない。

人を、守りたい。誰かを、守りたい。殺したくない。守りたい。殺したくない。

心の中の私が言う。

「本当にお前が守れるのか？」

もう一人の私が叫ぶ。

「守らなきゃいけないんだ！」

「どうして？」

「どうしてって……！」

「それに、出来るの？」

「やらなくちゃ駄目なの！」

「教官すら守れないのに？」

「でも、私がやらなくちゃ、また……」

「人を殺して嫌な思いをしちゃう？」

私は、言葉につまった。

「宮藤芳佳。お前は、弱い」

「……」

「守るために、殺さなきゃいけないときもある」
「……そんなの、間違ってる」

『私』はぐいと体を私に近づけた。

「だから弱い、いや、甘いんだ。宮藤芳佳。お前は世界を舐めている」
「そんなことない」

「軍人は人を殺すものなんだよ？ウィッチだってそう」
「でも、私は、殺したくない」

あきれたように首をふった『私』は、遂にこう言った。

「じゃあ、死ぬのはどう？」

気付けば、回りはいつもの『森』だった。

「お前が死んだら、このオラーシヤの人たちも死なずにすむんだよ？」

「「そうだ、そうだ」」

後ろに立つ亡者が肯定する。

自分の「死」を肯定される。

「……………私が、死ねば、この人たちは死なずに済む」

「「そうだ、そうだ。俺たちはお前に殺された」」

「戦争も、起きない」

「「未来は変わる」」

「でも、人を守れない……………」

「「お前が死ねば、『より多くの』人が助かる」」

「……………」

「お前が死ぬのが最善だ」「なぜ生き返った」「死んでれば教官も死なずに済んだ」

気付くと、笑みが零れていた。

思えば私は死んだとき、自ら願って死んだのだ。それが、何故か生き返ってしまった。

私は、最初から死ぬべきだったのだ。

私は目を閉じ。

そこに、ネウロイがいた。

紅炎の魔女

紅炎の魔女・一話

どうも、皆様ごきげんよう。

第501統合戦闘航空団所属でガリア空軍大尉、ペリーヌ・クロス
テルマンですわ。

もともと、去年のカールスラント解放以降は大攻勢後の戦力備蓄や
他のJFWとの兼ね合いもあって非番も多いですので、

以前と比べれば出撃は減ってしまいましたけれども。

「ペリーヌさん、今日は来てくれてありがとうございます」

「同じ部隊の仲間を迎えに行くのは当然の事ですわ。パ・ド・カレーは
昨日行つたばかりですしね」

「ありがとうございます。……芳佳ちゃん、元気かなあ」

「むしろ、あの宮藤さんが病気になるなんて想像もつきませんわ」

私は今、リーネさんと二人でトリエステの港まで来ています。

トリエステといえばスエズ解放が成つた今、扶桑方面に向かう要
港。

そこに今日、坂本中佐直々の召集で扶桑に一時帰国していた宮藤さ
んが到着する事になっておりますの。

あの子が大尉に昇進するなんて通信が扶桑から届いた時は、私含め
てみなさん本当に驚いていましたわ。

その夜のパーティーは……あまり思い出したくないですけども、
とにかくみなさん喜んでいましたわ。

それで、翌日に坂本中佐の通信が再度入って、昇進ついでにいつた
ん帰ってきたらどうだという提案に宮藤さんが頷いたのが一月にな
りますから、あの子にお会いするのは二ヶ月ぶりですわね。

この二ヶ月間は……少し大変でしたわ。

カールスラント解放を機にウィッチを引退なさったはずのバルク
ホルン大尉は二週間おきに宮藤さんが帰ってきてないか聞きにわざ
わざこのウィーンまで車でいらつしやいましたし、リーネさんもずつ

と寂しげでしたし。

それに、他のみなさんもどこかいつもと違った雰囲気で、少し変な感じでしたわ。

それだけ、あの子が私たち501にとって無くてはならない存在になっっているのでしょうかね。

あの坂本少佐にくつつく忌々しい新入りが、ですわよ？

……でも、私たちがガリアやヴェネツィア、それにベルリンを解放することが出来たのはあの子のおかげと言っても過言ではありませんし、今は感謝していますわ。

「ペリーヌさんペリーヌさん、もしかしてあれじゃないですか!？」

「リーネさんがそう言うならそうなんでしょうけれど、はしたないですわよ。………気持ちにはわからなくてもいいですけど」

リーネさん、はしやぎすぎて魔法力を発動させてますわね。

気持ちはわかりますがもっとう淑女らしく……

あつ、私の目でも見えてきましたわ。

あの濃緑に大きな扶桑海軍翼章は……確か坂本中佐が”ニシキ”と呼んでいらした飛行艇で、ああ見えて扶桑と欧州を一週間で結べるんだとか。

ああ、私もあれに乗って扶桑まで坂本中佐に会いに行きたいですわ。

まだ大きな攻勢の予定はありませんし、戦線は落ち着いていますし。

……冗談ですわよ？

私たち501には欧州を守るといふ崇高な任務があるのですから。ネウロイを殲滅するまで、私たち501は今日も、明日も飛び続けるのですわ！

——この時、翌月には501が解散することになるなんて誰も想像していませんでしたわ。

紅炎の魔女・二話

「うーん、良い気持ち！」

ハッチから入り込んだ心地よい風を胸一杯に吸い込む。
揺れや染み付いた磯臭さは慣れたけど、やっぱり風の有る無しとい
うのは大きい。

「あ、扶桑艦隊だ」

遠くに見えるのは、紅白の旗を掲げる軍艦たち。
そう、いくら地中海と言えどもここはトリエステ、人類の拠点の軍
港。

遠くの砂浜に打ち付ける白波、なんてものはここには存在せず、あ
るのは視界を埋める大量の軍艦たちだ。

今日も扶桑艦隊の他にもリベリオンやブリタニア、ヴェネチアなど
様々な国の軍艦が来たる決戦に備え、停泊しているのが見えた。

(ん？あれは……)

少し視線を下げた私に、二つの小さな人影が見えた。

「お帰りー、芳佳ちゃんー！」

「お帰りなさいませ、宮藤さんー！」

(リーネちゃんとペリーヌさん！)

わざわざ来てくれたんだ！

私は、荷物をとりあえず置いて駆け寄る事にした。

「おーいー！」

私は手を降りながら走る。

なにしろ二ヶ月ぶりだ。

戦時中の二ヶ月は平時のそれとは全く違う意味を持つ。
どこかの町が襲われたりしていないかな。
みんな無事なのかな。
だれも怪我してないかな。
近況を知りたい。
それに、再開を喜びたい。
私は、一心不乱に走った。

「リーネちゃん！ペリーヌさん！ただいm——」

あれ？

突然下がる視界。

あ、アスファルトが劣化してる。

やっぱり戦争中だとしても軍事が優先だからかな。

早く私たちが戦争を終わらせないと。

……とりあえず、そのまま何もしなければ顔面を強打するだろう。

そして私はそれが出来る。

だてに坂本さんの訓練を受けているわけじゃないんだ。

それに、何故か魔法力が発現して耳と尻尾が出ている今、反射神経は強化されている。

しかし、私は受け身を取らない。いや、取れない。

体が言うことを聞いてくれない。

何で。

どうして。

私の体はまるで何かに操られたように動かない。

あ、あと数十センチで地面が——

「芳佳ちゃん!？」

——ムニユン。

何か柔らかいものに包まれる私の顔。
自分の尻尾が揺れているのが実感出来る。

——ああ、久しぶりの感触。

頭の中に、壮年男性の声が聞こえた、気がした。

「では、まもなく発車いたしますので」

二十分後、私たちは軍用列車に組み込まれた客車に案内されていた。

「わあ、綺麗！」

リーネちゃんが喜ぶのも無理は無い、そう思えるほど豪華な車両だ。

(……というか、豪華すぎじゃない?)

金属の車体はエンジ色に塗られ、至るところに惜しげもなく金の彫刻が施されている。

床は赤い絨毯で照明も派手だ。

おそらく民間から徴用されたのだろうこの車両は、しかし普段の用の形跡が無いほどに美しく維持されていた。

(うーん、なんか気が引けるなあ)

果たして戦時下にこんな贅沢をしても良いのだろうか。

戦果云々と言われても他のウィッチだって命を懸けて戦っているのに、自分たちとそんな差があつて良いのだろうか。

特に最近、カールスラントが解放されて東部戦線のウィッチたちと交流するようになってからその気持ちは更に大きくなっていった。

(私よりも良い待遇を受けるべき人がいるはずなのに……)

みんなは気にしていないようだが、どうしても気になってしまう。
——それとは別に、見た目が派手すぎて気になるというのもあるけど。

「みやふじさん？」

「はっ、はい！」

いつの間にかペリーヌさんが後ろに立っていた。

彼女は少し呆れたような顔を見ると、私の肩をグツと掴んだ。

「全く……ほら、入りますわよ」

「え、ちよ、わ、わかりましたから肩を持たないでー！」

ポスン、とふかふかのシートに座らされる。

隣はリーネちゃん、向かいにペリーヌさんが座っているが、それでも余りある広さに豪華さを実感し、どうにも居心地が悪い。

「芳佳ちゃん、そんな気にしなくても大丈夫だよ」

リーネちゃんはそう言うけど、前線を思うとやはり気が引けてしま
う。

「そうですね宮藤さん。あなたはもう誰もが認めるエースなんです。
良い待遇を受けても誰も文句はつけませんし、むしろそう扱わなければ
暴動が起きますわ」

「エ、エースなんてそんな大層なものじゃ……」

私はネウロイを倒したくて飛んでるのでは無いし。

「あなたが大層なものじゃなかったらほとんどの人はエースを名乗る
資格なんてありませんわ。……坂本中佐は別ですけど」

「でも……」

「そうだよ芳佳ちゃん、ウィーンまで楽しもう？それに……ほら、ペリーヌさん？」

リーネちゃんが何かアイコンタクトを取る。

何だろう？

リーネちゃんが促すと、ペリーヌさんは恥ずかしそうにしやべり始めた。

「ほら、せつかく大尉になったのですし？それに、扶桑からの長旅でお疲れでしょうし？ですから、その……」

「……？」

「芳佳ちゃん、この車両、ペリーヌさんが手配してくれたんだよ？」

「ちよつとリーネさん!？」

「え、ペリーヌさんが!？」

私は素直に驚いた。

こんな豪華な車両、手配するのは大変だったはずだ。

それを戦闘をこなしながらもしてくれたんだ。

「……バルクホルン少佐や他の皆さんに協力していただけなければ出来ませんでしたわ。それに、あの新しく入ったヘルマさんだって手伝ってくれましたのよ？」

「え、ヘルマちゃんも……？」

ヘルマちゃんというのは、ベルリン戦線から加入したジェットストライカーの使い手だ。

少し頑固な所があるから、私とはあまり話さないのに……

「まあ、要するに、隊員皆からの昇進祝いという訳ですから、楽しんでいただけますわよ？……宮藤さん？」

みんな、私のためにそこまでしてくれたんだ。

貴重な戦いの間の時間を使って。

今更ながら、なんて素敵なお仲間たちだ。

501に入って、本当に良かった。

あれ、そう思ったらなにか涙が……

「わっ、芳佳ちゃんなんで泣いてるの!?!」

「ちよつとなにも泣くことは無いでしょう!?!」

「い、え、ヒック、嬉しいんだけど、みんなが、私のために、用意してくれたのに、グスツ、ふさわしくないなんて思っちゃったのが、ズルツ、申し訳なくって……」

みんな、ありがとう。

そして、ごめんね。

「ほら、涙をお拭きなさい?」

「ペリーヌさん……」

ハンカチで頬をぬぐわれる。

ペリーヌさんは、本当に優しい。

アメリカさんが尊敬するのもわかる。

「よし」と私は前を向いた。

「ほんつとうに、ありがとう!私、楽しませてもらうね!」

ちよつと遠くで蒸気機関車の汽笛が聞こえた。

もうすぐ発車するのだろう。

「うん!」

「ええ、そうしてくださいな。……ほら、ちよつと動き始めましたわ」

二人が返事をする、カタン、コトンと規則正しい振動が伝わり始めた。

なんの変哲も無いこの音を聞くだけでも、私には、無性に楽しく聞こえた。

「ところでペリーヌさん。この車両、すごく豪華ですけど何の車両なんでしょうか？」

「……」

「ペリーヌさん？」

どうしたんだろう、すっごく暗い顔になってる。

「……カールスラント」

「え？」

「カールスラント皇室の、車両ですわ」

「……えっ？」

「バルクホルンさんが、叙勲で謁見した時に頼んだんです。……皇室から手紙が来たときのミーナ隊長の顔は、今でも忘れられませんわ」

青ざめるミーナさんの顔が容易に想像できる。

「あはは……」

苦笑して、私は一つ決意した。

バルクホルンさんには感謝するけど、ミーナさんには謝っておこう。

列車は、今まさにオストマルク国境を越えんとしていた。

「——そうか、宮藤は無事着いたか。何？バルクホルンが？……うむ、わかった。私ももうすぐそちらに向かう。ああ、ウィーンにも立ち寄るよ。では、達者でな、ミーナ」

ガチヤン。

「では中佐、そろそろ……」

「ああ、わかつている。土方、今回もよろしく頼む」

「ええ、もちろんです中佐」

「はっはっはっ、いつもありがとう。ところで、今回の航路だが」

「はい。本日一二〇〇横須賀を発ちその後佐世保に一六〇〇に到着します。補給物資積み込みの後、翌一〇〇〇佐世保を発ち、その後は標準的な太平洋航路の予定です」

「わかった。では、行くとしようか」

「はっ」

廊下を歩きながら、扶桑海軍大佐・坂本美緒は喜んでいた。

彼女は昨日付で晴れて大佐に昇進し、これから同時に在狩国駐留武官としてカールスラントに派遣されるところなのである。

またヨーロッパでかつての戦友と会える。

それに、航路の関係上停泊する佐世保では、恩師である北郷とも会う予定もあるのだ。

これで心を弾ませないわけがない。

彼女が空をストライカーで飛ばなくなって久しい。

たまに頼まれて後進のウィッチの教育にも顔を出す以外はほとんどデスクワークという現在の環境は彼女にとっては苦痛であり、それを和らげる久しぶりの出来事だったのだ。

当時の従兵、土方兵曹長の日記によれば欧州から帰国してから一年の間で最も元気だったそうだから、その機嫌の良さが窺い知れる。

そしてそのまま彼女は乗り込み、離水を待った。

——そして、二式は横須賀を発った。

当然のことだが。

そのフライトが、後に扶桑を救うことになるとは、当時は誰も想像し得なかった。

紅炎の魔女・三話

長崎県、針尾島。

そこは、扶桑の田舎に行けばどこにでも見られるようなのかな風景の広がる、いたって普通の島だ。

しかし、そこには一つだけ、他には無い特徴的な建造物があつた。牧歌的な風景のただ中に、強烈なオーラを放ち屹立する三本の巨大な塔。

人はそこを、針尾送信所と呼ぶ。

そこそが、はるか南太平洋の広大な資源地帯と本土を電波で繋ぐ、扶桑皇国の要なのだ。

「北郷さん、どう思います?」

「……確かに妙だ。船橋と依佐美は?」

そんな送信所に、通信技師と深刻そうに地図を囲むまばゆい海軍二種軍装の女性がいた。

「駄目でした。検見川の通信さんも、全く通じなかつた、と」

「ふむ……」

その女性の名は北郷章香。

主に扶桑海事変で活躍し、坂本美緒、若本徹子、竹井醇子など数々のエースウィッチを弟子に持つ伝説のウィッチ。

今大戦では前線を退き佐世保航空予備学校・校長として後進の教育に励んでいる。

が、そこは歴戦の兵士である。

佐世保の海軍関連施設で何か問題が起こる度にそこに赴き豊富な経験と知識に裏打ちされたアドバイスを、ある種の相談役という立場も持っていた。

今日もその一慣で先週から太平洋上で発生している電波障害の対処を命じられ、この針尾にやって来たのだ。

「最初は一分くらいで回復したんで、上は機器の不具合で処理してたんですが、最近は十分に達しようとして……そう、ここ。ちょうどこの辺りです」

南洋島々扶桑本土間の一切の通信が数分間遮断されるといふそれは、扶桑の全ての船乗りの悩みの種となっていた。

「漁師や民間船舶運営会社の声に、海軍はベテランの電気通信技術者を召集し、また調査隊を太平洋に派遣。」

「彼らの努力により原因は不明なものの地点だけは割り出した。」

「ここで、通信を途切れさせる何かが発生したんです」

技師が指差すのは小笠原の南東の海山帯。

地図には何も書かれていないが、すぐ横を扶桑本土と南洋島間のメインルートが通っているため軍民間問わず船の往来が激しい地点である。

「根拠は？」

「本土と南洋、新京の通信記録、また調査隊の報告から割り出しました。彼らの報告によれば、ここを通過する前後で通信が完全に途絶したそうです。また実験的に蓬莱島経由で通信を試みた所、送受信ともに成功しました」

「なるほど……視覚的に何か見えたりは？」

「しなかったようです。ただ通信だけが切れた、と」

北郷は考える。

何が原因なんだ？

まず考えられるのは機器の故障だが、全ての船舶が同時に故障するなど有り得ない。

その海域全体に何かがあると考えるべきだ。

もしくは、電波に対抗する何か――

（そういえば前に坂本が、電波妨害をするネウロイがいるって……）
と、その時だった。

「失礼します」

通信室内に凜とした女性の声が響いた。

北郷は、笑みを浮かべた。

「やあ坂本。久しぶりだね」

「ええ、お久しぶりです北郷先生。……あの、お邪魔だったでしょうか」

坂本は少し怖じ気付いて言った。

恩師を訪ねて学校に赴いたところここを教えられて戸を叩いたのだが、なにせ緊急事態の真っ最中である。

何十もの技師たちの視線が坂本を貫いたのだ。

「いや、こちらこそ約束の時間に居れなくてすまない。しかし助かった。もし時間が大丈夫なら、少し手伝ってくれないか」

「時間なら、明日まで問題ありません。しかし、先生がわからないことに助言なんて出来まずでしょうか」

が、そこは恩師の前である。

すぐに気を整えた坂本は北郷の言葉に返す。

と同時に恩師である北郷が自分に手伝いを頼むほどの相当難しい事態であることを坂本は察し、少し不安になっていた。

「ああ、問題ない。緊急事態なんだ、よろしく頼む」

「……わかりました。お手伝い致します」

この時坂本は、扶桑を取り巻く危機について何も知らなかった。

「しかし先生、一体何が起こってるんですか？」

「ああ、これを見てくれ——」

「ねえ芳佳、昨日変な電話が来たんだって？」

次の日、所変わってウィーンの501基地では褐色の見目麗しい少女、フランチェスカ・ルツキーニと芳佳が廊下で立ち話に興じていた。

話題は、昨夜芳佳に来た奇妙な電話のこと。

「うん。雑音だらけでほとんど聞こえなかったんだけど、誰か喋ったの。すぐ切れちゃったけど、ほんとビックリしたよー」

「ニシシシ、もしかしてそれ……」

「な、何ルツキーニちゃん……?」

「幽霊だったりしてー!」

「もー、やめてよお」

ネウロイの襲撃も無い平和な時間。

哨戒も他部隊がやっているため、基地の中はどこかのんびりとしていた。

「でも本当に何だったんだらう？」

「うーん……わかんないっ！」

「ルツキーニちゃん……」

ルツキーニちゃんは変わらないなあ、と思いつつ芳佳は足を止めた。

「じゃあ、また後でね」

「うん！それにしてもミーナに呼ばれるなんて、何やらかしたの？」

「うーん、何もしてないんだけど」

そう、今朝芳佳は501の隊長であるミーナ准将に呼び出されていたのだ。

ルツキーニに手を振り、ノックして入室する。

「ミーナさん、宮藤芳佳です。失礼します」

入室するとすぐに、デスクに座るミーナが目に入る。

目に入ったのだが――

「……宮藤さん、そこに座って」

「ミーナさん、あの、大丈夫ですか？良かったら治療を……」

「要らないわ」

ミーナは、明らかに普段と違っていた。

目は充血し美しい赤髪はボサボサ、自慢の声も少し震えている。

まるで寝ていないかのようなその姿に芳佳は言葉をかけようとしたが、手で制されてしまう。

「宮藤さん、あなたに言わなければいけない事があるの」

仕方なく、芳佳はソファに座りミーナを見た。

が、結局芳佳がソファに座っていたのは五秒ほどの事だった。

「扶桑との通信が、完全に途絶したわ」